
せいていさんがんばって！

えいせん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

せいていさんがんばって！

【Zマーク】

Z5694Z

【作者名】

えいせん

【あらすじ】

その男、転生する。帝王の力をその身に宿し。その女、前進する。哀しみを背中に背負い。その者、渴望する。このぬくもりと、あの『愛』を。これは、格闘ゲームの素晴らしい話を説くお話（嘘）。これは、『帝王』の話。

ハニカムワード（前書き）

何一つ考えてないこの小説を開いてくれてありがとう！
楽しんでもらいたりいいなー！

くそつ！

一体どうなつてやがるんだよおい！

いつものように村に『お邪魔』して食いもんを貰つて・・・あわ
よくば女も頂こうがなんて俺達は思つてた。

なのに・・・これは一体どういうことなんだ！？

「何やつてんだよお前らーこんな奴らにてこずりやがつてー..
「む、無理だよアーチー！」いつら、いつもと違つ！

村人達が俺達に抵抗してきたことなんていいくらでもある。
だけど、俺達が今まで生きてこれたのはそんな奴らを力でねじ伏
せて來たからだ。

「くそー！?なんだよー!!」う、うわああああああつーー

また一人、仲間が死んだ。

「俺達の村に入つてきやがつてー死んでしまえ！
「な、なんなんだよー！」

純粹な強さで言えば俺達が確實に強いだろう。

俺達は賊だ。

俺達の方が圧倒的に経験を積んでいる。

村人達の中では今まで人を殺したことすらない奴だつて少なくな
いだろう。

なのに、俺達が押されている。

「ハアアアツー！」

「ぐえつ」

一人、俺達の誰よりも強い女がいる。
腰まで届く紅い髪。
俺達と大差ないほどの長身で、鋭い目。
力強い印象を与えるその風貌で、俺の仲間を次々となぎ倒していく。

この女の槍によつて俺の仲間は何人も死んでいったが、この女に俺達が劣勢になるほどの力は無い、だろう。
どれだけ強かろうが、所詮一人で出来ることには限りがある。

俺達がここまで劣勢に立たされているのは恐らく、たった一つのこと。

・・・俺達は、村人達に恐怖を感じている。

この村の雰囲気が、異質だった。

村人の一人を殺す。

そうすると、どんな村でも足が震え、逃げ出す奴が居た。

なのに・・・この村はどうだー？

怒りに顔を歪ませて、次から次に突っ込んできた。

片腕を失くせば、もう片方の腕で。

両足を失くせば、両腕で首を締めあげて。

両腕を失くせば、その体で仲間の壁になり。

正気の沙汰じゃねえ！

足が震える？

震えているのは俺達の方だ！

俺達は人間だ。

人間ってやつは、恐怖って感情がある。

人を殺す恐怖ってやつは、俺達だって感じてる。

それを俺達は殺し続けることで、感じないようついに思わせているんだ。

それでも、死ぬ恐怖つてもんは誤魔化そつて思つても出来るもんじやない。

出来たらもうそれは人間じやない。

・・・鬼だ。

こいつらは人間なのか？

傷つくことを躊躇わず、自分が戦えないと悟ると仲間のために命を張り。

これが、ただの村人だつていうのか！？

村『人』なのか！？

あり得ない、人間の出来る事じやない！

こいつらは、まるで・・・！

「ヒツ・・・！？」

なんだ、この女・・・

肩で揃えられた銀の髪。

さつきの女よりは小さいだろうが、すらりとした体。

その体を、漆黒の服で包む、絶世の美女と呼ぶに相応しい容姿を持つた女は、防具の一つも付けずに、しつしつ歩いて来る。

見ようによつては天使が降り立つたよつにも見えるかもしけないが、俺には悪魔にしか見えなかつた。

殺氣の一つも感じられないその女の目には、俺たちなど視界に入つてすらいなかつた。

「俺達には帝王様がついているんだ！負けるはずがないんだ！」
「何？ 帝王だと！？」

帝王。

そうか、こいつが帝王か。

ということは、あの女は『陥陣営』か。

たつた一人で賊を潰してまわつていると聞いたことはあるが・・・

この村に居やがつたか。

ツイてねえ・・・ツイてねえが、一人さえ潰せればこの村の奴ら
だつて、ビビつて逃げ

「ふむ。・・・貴様ら、かかつてくるがいい」

目が、あつた。

たつたそれだけで・・・俺は、殺された。

格が、違う。

足が、手が、動かない。

凛としたその声が俺の体を侵食していく。

圧倒的な力の差を感じ、俺の体は震えるとこつらとすら放棄したようだ。

「こぬのならこちらから行くぞー。」

物凄い速さでこちらに近づいてくる姿をなんとか目で捉えるが、体は一向に動かない。

その手で道を阻む仲間を蹴散らしていく。

それを見て俺の頭は警告を全身に伝えていくが、肝心の体は反応すら返してくれない。

気がつけば、俺は血を吐いていた。

痛みすら感じずに、ただその不快感だけを認識して、急に意識が遠のいていく。

ツイてねえ。

村人が異常だったのでは無かった。

この女の、帝王の霸気が異質だったのだ。

・・・本当に、ツイてねえ。

俺は、倒れるという最後の仕事のためにつむぐ生き返った体に鞭を打ち、後ろを向いた。

自分を殺した相手と思えないほどに美しい『帝王』の背には、何故か哀しい漢が視えた気がした。

ついでに（後書き）

「うちの帝王はエボタンカラーです。」

あなたの帝王は、何カラーラー？

続く・・・続くのか？

せじまつー（前書き）

次はトキか！ラオウか！
ジョインジョインジョイン

ジョイントキイ

はじめて

転生。

もし自分が転生できると聞いた時、皆はどういひだりつか。
夢のよつな世界へ行けることを喜ぶのか。
不思議な力を得ることに涙するのか。
それとも、今までの世界から消えること悲しむのか。

俺か？

俺はもうひるん、喜んだよ。

「本当に俺が転生するのか！？」
「本當だ。私が嘘をつく意味がない」

急に大きな声を出した俺を呆れた様な田で見る男。
赤と黒の派手なスーツに身を包んでいた、とにかくこれといつた特徴のない男。

今の状況的に、こいつが神だと思つただが・・・影が薄いな。
服の派手さに負けてるよ。

「君のような反応をしてくれる方がやりやすい

「そうなのか？」

「泣かれたりしたら」「うちも困るんだ。時間がかかるからな」「確かに」

「そんなことより、だ。君もわかつてているだろ？·なんの特典も付けてずに送れる訳がないといつことを」「

男がそう言つて、何もない空間から漢字が沢山書かれたスロット
が出て来た。

「そのスロットを回してくれ。その内容に沿つた特典をあげようぢ
やないか」

「内容？」

「そうだな・・・例えば『頂肉体』が出たとしよう。その世界での
人類最強の肉体を手に入れれる。他にもスロットの字次第では架空
の技や力を手に入れることも出来る」

非常に夢が膨らむ内容だ。

「まあ、全てがスロットの字で決まるから・・・『無能力』なんて
のが出る」とも

「えつ？・・・え、えつ！？」

「スロットだぞ？スロットは博打だ」

「ちょっとちょっと！特典くれるんじゃないの！？え！？」

「それはまあ、能力がないのが特典になる訳で・・・『超不幸』と

かよりはマシだと思えば

「その『超不幸』とかになつたらビーさん？ビーさんのよー！？」

「まあ、運命だと思つてくれ」

と、こうことは・・・弱くてニユーゲームなんて最悪なことも起
こるかもしれないのか。

・・・もとのせかいにかえりたいよ。

「まだスロットを回してないから落ち込むこともないと思つが、

「そうだよね！いいの出るよねー！」

「知らん」

果てしなく不安になる気持ちを抑えて、スロットを・・・回す！
何が出るんだ？

聖？聖なる力的な？

帝？聖帝になるの？

王？聖帝王ってなに？

「良かつたじやないか。大分良い特典だぞ『聖帝王』は

「そうなの？」

「ああ、架空の能力をもらう訳だからな」

架空の能力か・・・

聖帝で帝王・・・

ん？んん！？

「もしかして・・・」

「そうだ。あの聖帝だ。・・・格闘ゲーム仕様だがな」

それってどうなの？

喜ぶべきなのか悲しむべきなのか・・・

「微妙な顔をするな。あのゲームのバランスがおかしいだけだ。十分強力だよ」
「なら強いのか。

良かつたークソみたいな特典じゃなくて！
いやまあ、病人の方がいいなーとかちょっと思つたりもしたよ。
でも、十分強いらしいしもう満足だね。

うん。

良かつたークソみたいな特典じゃなくて！！

「良かつたークソみたいな特典じゃなくて！！
運が良かつたじやないか

やつぱり声に出して言つべきだね！

「世界は・・・恋姫の世界に行つてもいい

おお！

チート特典で大暴れしてモテモテ生活！
なんてことも・・・いいじやないか！

「容姿の設定も聞くが・・・望みはあるか？」
「そこはやっぱり・・・10人中9人が振り向くよつたレベルの容
姿が欲しいなと」
「わかった。そうしようじやないか。」

キテる。
キテるよー。

俺の時代キテるよ！！
モテモテ生活確定ですね！！

「お前の一ヤついた顔を見ると何を考えているか手に取るよついでわかるな。まあ、逝つてこい
逝つてきます！！」

お父さん、お母さん。
幸せになつてきます！

世界から、一人、飛び立つた。

前が見えない。

田を開けてないから見える訳がないんだけどね。

「あなた、これが私達の子ですよ」
「おお！お前に似てとても可愛らしい子だ！」

「もう、恥ずかしいことを言わないで下さいよ。」

「本当のことを言つて何が悪いと、うんだ」

「これが俺の孫、か・・・」

「そうですよお父さん。抱いてみます?」

「う、うむ・・・悪くないな・・・」

田を開けると、長身の男が俺を抱きかかえていた。
齡50といつたところか、渋さの漂うその風貌はさながら敏腕ス
ナイパーのよう。

しかし、その田を真っ赤に腫らしてくしゃくしゃになつたその顔
は、孫の誕生を喜ぶ爺そのものだつた。

「そうか、孫か・・・こんなに早く見れるなんてな・・・」

「お、お父さん! ? ビうしたの! ?」

「いや・・・ちょっと田にゴミが入つただけだ。大丈夫だよ」

「そう・・・お父さん、ありがとうね」

「お前は・・・俺を泣かせたいのか?」

目から涙を溢れさせた俺の爺さんのその横で、俺の親が仲良く笑
つて見つめていた。
その笑顔を見ていると、前の親を思い出してしまった。

碌な親孝行もせずに、半ば家出のように一人暮らしを始めた。
最後に見た両親の顔は、寂しそうに笑っていた。

俺は才能という奴に恵まれていなかつたが、それでも俺の頑張り
を評価してくれた。

俺が生まれたとき、今の親のように笑っていたのだろうか。
俺が居ないと知つて、どうするんだろうか。

そんなことを思つと、何かこみ上げてくるものが。

気がついたら、俺は大声で泣いていた。

「お、おいー？ いつたいどうすればいいのだー？」

「お父さん、落ち着いて」

お父さん、お母さん。

『父さん、母さん』。

ここで幸せになります。

はじまり（後書き）

主人公と両親の名前、どうしたらいいのか・・・
帝王さんには哀しみを背負つてもらわないといけないし・・・

続け！

せこひやうへー(前書き)

短い・・・
かっこ文太おくれーー！

せいじゅつ！

日記を、書いつと思つ。

3歳になり、文字も少しづつだが理解できるようになつてきた。でも、時々日本の文字が恋しくなつてくる。

何故かこの世界は日本語で成り立つてゐるけど、字は漢字ばかりで正直よくわからない。

だから、日本語で書く。

日本語で書けば見られても理解出来ないだろ？

3歳になつたけど、相変わらず平和だ。

この世界が三国志をモチーフにした世界だと忘れそなぐらい。

そういうえば三国志や恋姫、あと21世紀の科学、兵法の情報とは記憶からじつそり抜け落ちてたけど未だに記憶が戻らない。

女がとても強い世界つてことぐらいしか覚えてないけど、神様が

改变を恐れて何かしたんだろうか？

体が女だったのもびっくりしたけど、女が強い世界なら結果オーライかもしねない。

体も少しづつ、だがしつかりと成長してきている。

と言つても、3歳だから絶世の美女な訳がないけど。

容姿を良くしてもらつたのはハーレムを作りたかったからであつて、男にモテたいからじゃない。

大人になつたら、男からの視線も増えるのだろうか。

・・・想像したくない。

どうせなら精神も女にしてくれば楽だったのに。

神様にもらつた転生特典だけど、全くもつて使えない。

聖帝の力を貰つたけど、それは経験や技術であつて、体を鍛えないと十全に發揮しないものだった。

一度、鍛えようと外に出てボロボロになつて帰つて来た時は両親に泣きつかれたので、もう少し成長するまでは自重しようと思つ。3歳の体で文字を書くのがここまで重労働とは思わなかつた。

8歳になった。

中々に成長したと思つ。

両親も喜んでくれた。

胸は無だけど・・・8歳だから別に大丈夫なはずだ。

流石に8年間もこの体で生きていると、愛着が湧いてくる。しつかりと美しい幼女になつたんじゃないだろうか。

最近、男の子からの視線をよく感じる。

稀に大人の視線も交じつていて少し・・・いや、かなり気色悪い。男には絶対にやらん。

・・・綺麗なお姉さんなら話は別だけど。

6歳から体を鍛え始めたけど、少しずつだけど効果が出てる・・・
と思う。

何故か見た目に表れにくいので、よくわからないが。

ムキムキの8歳幼女になるのも何とも言えないから、善しとしよ
う。

しかし・・・男口調なのと俺と喧嘩のをやめないと一々両親がうる
さいのはなんとかならないのか。

まあ、自分の娘が男口調だつたら少々アレだし、現実で俺と喧嘩
女は少しイタイような気もしなくはない。

でも、口調を変えると何か自分とは違う気がしてどうも落ち着か
ない。

特に父がうるさくて・・・そろそろ諦めて欲しい。

俺も、もう15になる。

絶世の美女にかなり近づいたんじゃないだろうか。

背もかなり伸びたし、何よりも男から言い寄られることが日常茶
飯事になつたことが、大分魅力がでてきた証拠だと思つ。
男に恋愛感情を抱かないのは相変わらずだけど。

最近、帝王の力に体が追いついてきた。

かなり嬉しい。

でも、まだ体に負担が掛かるようで、全力を出せるようになるの

はまだ先のようだ。

頑張れ、俺。

そろそろ口調のことは諦めてくれてもいいんじゃないだろうか。

せいかよひー（後書き）

オリキャラ、高順さんしか考えてないんですよー
出してほしいキャラとか、教えてもらえないかな？（チラツ

はじめてー（前書き）

私の中二パワーを解放しても、この程度だというのか・・・
相変わらず文字数が・・・

はじめて！

きょう、はじめてひとをころした。

怖い。

だけど、それ以上に心地良い。

冷静になつたとき、殺人の記憶に苛まれて動けなくなるのかと思つたけど、むしろ、村を守るために殺したこと感謝されたことで、気分が高まつて落ち着かない。

正直、殺しているときは恐怖も躊躇いも何も無かつた。
そんなもの、感じる訳がなかつた。

村を守るために人を殺す。

今まで人を殺したことのない俺がそう出来たことを、勇気ある行動だと両親に褒められた。

確かにそれは周りから感謝されるに値するものだったのかもしれない。

でも俺は、そんな格好いいことをしたと言える自信はなかつた。
何故なら、俺は笑つてゐるから。

「賊だー！賊が来たぞー！」
「なんだつてー！」

突然この村を賊が襲つてきたと聞いたとき、俺は真っ先に出て行

つた。

素手で戦えるのが俺だけで、特に準備するものもなかつたから一足先に賊を見に行つてみた。

むさい。

この賊を表す言葉はそれだけで十分、そう思えるほどの憲苦しい雰囲気だつた。

「アニキ、この村はどんな女が居ますかねえ！」

「お前の頭ン中はそれしかねえのかよ・・・まあ、イイ女がいた方がキモチイイけどな！」

「アニキイ、美味しいもん一杯えるかなあ・・・最近、碌な食いもん食つてねえよ・・・」

「メシも女も手に入れて、さつさと帰るぞ。」

男、男、男。

見渡す限りの男。

遊びに行くような口で、男達は喋る。

辛うじて残つてゐる記憶によると女の方が強いみたいだけど、まあそつとも限らないだらうし、何しろ実戦は初めてだから油断はない。

遊びに行くような軽さで村を襲つつことは、それだけ慣れてるのかもしれない。

「くつくつくつ・・・ん？」

俺に気がついたのか、賊の奴らは厭な笑みを浮かべながらくつちに近づいてくる。

「よつ嬢ちゃん。迷子にでもなつたのかい？」

「へつへつ・・・・・イイ女じやねえか。これはこの村に期待せやるを得ねえなあ・・・・」

氣色悪い。

俺を厭らしい田で見てくる賊達。

何かが体を這いするような感覺、嫌悪感。この体になつてから、男が苦手になつた。この感覺は、全く慣れない。

慣れたい、とも思わないけど。

「お嬢ちやん、おじわん達に何の用かな?もしかして、イイコトしてくれるとか?」

「イイっすねえ!俺、この娘好みっすわ!」

「俺が声を掛けたんだ。もちろん、俺が最初にシテもいひせえ・・・・・!」

欲望に塗れた田を向けられて、理屈の無い精神的苦痛を感じる。・・・・・よく我慢してゐ、俺。

「俺は村を守るために此処にこるだナダ。お前達の戯言に付か合つ氣はない!」

「なんだあ?正義の味方氣取りつて奴かあ?」

「いやー、カツコイイねえ!おじさん惚れちやいやうだよー・でもさあ・・・・武器も何もないくせに、何ができるつて言つただよー・・・・・」

苦痛しか生み出さない、耳障りな音が聞こえる。

・・・・よく我慢しだら、俺。

「むづ蹀るな。むせいんだよ、お前ら。やつと死んでくれよ

笑う。

その顔は多分、引きつってるけど。

「クソッ！馬鹿にしゃがって、ヒイヒイ言わしてやるうじやねえかよ！」

一斉に腰に差した武器を取り、襲いかかってくる。怒りに顔を歪ませた男達が一斉に駆けてくるそれは、中々に面白い光景じゃないだろうか。

「クソがつ！オラアッ！…」

俺がクスリと笑うと、益々顔を赤に染めて、男の剣が振り上げられる。

斬るというよりも潰すことに長けたその剣は、当たれば確実に骨をやられそうだ。

俺は、この状況でも余裕なようだ。

少なくとも、こんなことを悠長に考えれる程には。

その剣は、ひどく遅く視えた。
その体は、ひどく脆く視えた。

その遅い剣を左手で捌く。

大きな大きな、昂揚感。

初めての実戦なのに、俺の体は何も変わらないらしい。

その脆い体を右手で貫く。

小さな小さな、不快感。

初めての殺人なのに、俺の心はあまり痛まないらしい。

俺が貴いた男は、俺の手から零れるように崩れ落ちた。その体と繋ぐように、俺の右手には糸が引いていた。

「嘘……だろ……」

何かが喋った気がしなくもないけど、どうせ誰も喋らなくなるだろ。

笑う。

「フ……フフ……フハハハハ！」

その目は多分、笑つてないけど。

アレ？

おかしくない？
おかしいよね？
おかしいよね！？

「嘘……だろ……」

なんで、貴いてんだよ。

なんで、死んでんだよ？

「フ・・・フフ・・・・フハハハハ！」

なんで、笑ってんだよ！？

「冗談・・・だよな？」

人間の体を簡単に貫けるほど、素手は強くないはずだ。腹に一撃入れられたぐらいで、簡単に死なないはずだ。人間は、あんな風には

嗤えないはずだ。

そもそも、こいつは笑っているのか？

目を見開いたまま、只々笑い声を発し続ける。狂ったように、笑い続ける。

こいつの口元を聞いているだけで、何かが抜け落ちていくような気がした。

「ひ、ひいいつ！？」

こいつの狂気に錯乱したのか、俺の仲間が一斉にこいつに襲いかかる。

俺たちは、捕食者だ。

民の命を喰らって生きる。

こいつはこの村の民だから、俺達が襲うのは当たり前のこと。それなのに、俺の体が叫び続ける。

これは、駄目だと。

気がつけば、俺の仲間はもう数えるほどとなつた。

百人は居た俺の仲間は、ほとんどが地に伏していた。
生きている奴は居るのかと確かめようとして、やめた。
居るはずが、ないから。

右腕以外何一つ汚れていない死神が、こっちを向いた。
あまりにも美しく、ずっと見ていたいその姿。
だけど、俺はこいつを見る訳にはいかない。

俺は、目を逸らした。
目が合えば、死んでしまう気がして。
合わなくとも、死ぬけれど。

どうせ死ぬなら、死神は見たくない。

とても強い人に助太刀された、ということにしておいた。
流石に、五分ほどの間に初実戦の俺一人で殺つたことがばれれば、
恐怖の視線に晒されてしまう。
良くて、異常者扱いか。
悪ければ・・・殺されるかもしない。
苦しい嘘かと思ったけど、以外にすんなりと信じてくれた。

すごく、楽しかった。

体を鍛える努力をしたのは俺だから、この体は俺のもの。
だけど、体捌きや技、異常ともいえるほどの力は確実に俺自身の
ものじゃなくて。

転生者の恩恵としてこんな力を使って、まるで物語の主人公にな
ったような感覚。

人を殺すこと自体が楽しかったのか、自分の力を見せつけるのが
楽しかったのか。

或いは両方だったのか、俺には分からぬけど。
でも、楽しかったのは、紛れもない事実。

そんな自分が怖くて。

何故か、心地良かつた。

呼吸がしづらい。

体が痛い。

まだ足りない体で全力を出したから、しばらくは動くことすらで
きないと思う。

動けない言い訳を考えないと。

明日からの日々を想像して、少しばかり厭になるけど。

笑う。

その口は多分

あとで、はじめてひとをいたしました。

はじめの一（後書き）

チート能力持つたらやつぱり見せつけたくなると思つんですよー
私も無想流舞が使えたら移動が楽に・・・

早く哀しみを背負わせないと他キャラが一切出てこない・・・
陥陣當つていつ出るの??

・・・一話目と繋げるのはまだまだ先になりそう。」

出て欲しい武将とか、感想に書いて頂けると嬉しいです。

苦しいです。評価してください。と書いたらどれぐらいの人人が解つ
てくれるんだろ??

かあさん！（前書き）

可愛い女の子、今のところ主人公一人だけ。

これって、恋姫ですよね？あれ？

かあさん！

もう、三ヶ月経つた。

体を動かしたときのあの気だるい感覚も、もうない。

確かにあのときの力は素晴らしいけど、それから一ヶ月程は腕を上げるだけで激痛が走るほどだった。

本調子に戻るまで三ヶ月掛かるようなものは、とてもじゃないが使えるものじゃない。

欠落だらけの力の穴を埋めるほどこの体をつくるために久しぶりに体を動かすと、心地良い疲労を感じる。

・・・悪くない。

じつとしてるのは、多分俺には合わないから。

疲労に押されるように、木陰に座る。

修行という名の体を痛めつけるだけの作業。

傍目から見れば特殊な性癖を持つていると思われても仕方がないこの方法が、残念ながら一番効率が良かつた。

技術を磨く必要のない俺ぐらいしかやらない方法だけど、みるとるうちに体が強くなつていいくのがわかる。

やり始めたころは毎日のようじぱうぱうになつてきて、両親をよく泣かせた。

それからは切り傷など分かるような傷は付けないよつて腕をつけた。

まあそれでも心配はされたけど、泣かせるよつなことになつてない・・・と思つ。

痛みに苦悶の声を上げてのたうつ回っていた頃とは、比べ物にならないほど強くなつた。

痛みに耐性も出来てきて、声を上げることも少なくなつた。

激痛の中でも考えることが出来るようになつた頭の中は、戸惑いだけが流れていた。

あのときの感覚が、未だに抜けきらない。

右手の一撃だけで確実に殺していく、溢れるほど歓喜に満たされた瞬間。

力のない羽虫を玩ぶように圧倒し、まるでこの世界の神にでもなつたかのような優越感に浸る。

本当は、酷く哀しいことで。

それを楽しいと感じてはいけないかも知れない。
でも、これが楽しくないのなら。

何を楽しいと言えばいいのか、俺にはわからない。

俺は、どうなつてしまつたのか。

元々俺は、なんでもかんでもいいことをしようなんて考えるような善人ではなかつた。

でも、殺人を楽しむような悪人でもなかつたはずだ。

この世界では、いや、前の世界でもそのなかもしないけど、人を殺すことは必ずしも悪いわけではない。

自衛のために、愛する人を守るために、誇りのために。

自分の命を賭けた戦いは、それだけで格好良くみえると思つ。

でも、俺のそれは、悪としか言いようがなかつた。

一方的な蹂躪。

村を守るために、いつ免罪符を掲げて、逃がせばいいのに全員殺して。

戦意を失い抵抗すらしない者すら、殺す感覺に酔いしれて。本当に、俺はどうなってしまったのか。

平和を掲げた国で生きていた俺は良心の呵責に苛まれてもおかしくないのに、それどころか・・・

これが、俺の本質なのか。

それとも力に溺れて舞い上がっているだけで、時が経てば苦しむのだろうか。

考えても、仕方がない。

・・・帰ろう。

修行していた森から村へ帰ると、村が賊に襲われていた。もう、何人かは死んでるかもしね。走る。

乱戦の中、賊長を目指して。

また、村を守れる。

そう思いながら、賊の一人に飛び蹴りを放つ。

「ぐふふっ」

顎をすくらすように斜めに蹴り上げると、何とも表現しがたい声を発しながら地面に墜ちた。

「クソがつ！ やつちまえ！」

「死ねやああああつつ！」

流石にまた三ヶ月間痛みや氣だるさと同棲する氣はないから、自分の体が悲鳴を上げない程度の力を使うことにする。

賊が振り下ろした剣の横腹を蹴り、そのまま回し蹴りを放つ。剣の軌道をすくらされて何もないところに袈裟切りを放った賊の、その隙だらけの脇腹に“氣”と呼ばれるものを纏つた足が触れて。

何の抵抗もなくその腹を引き裂いた。

「グつ！ かはああつつ！？」

俺の脚が通つた道を、真つ赤な飛沫が飛んでいく。
それを見た奴らは驚愕に顔を歪めていく。

それを見た俺の口は、いい曲線を描いているだろつ。

初めて殺したときのような、遅く見えるような感覚は、血が滾るような感覚はなかつた。

それでも、こいつらには十分すぎる。
それでも、楽しむには十分すぎる。

気分が高まつていくのを感じながら、邪魔な奴を殺していく。
前ほどの力はなくとも、やっぱりそれは、蹂躪で。
やっぱり俺は、笑つてる。

襲い来る賊達を殺し続けながら、長に近づいていく。

眉間を狙つた突きをかわして、逆肩に手を当てそのまま踏み込みながら振り下ろした。

十字に引き裂いた体から飛び散る血飛沫を、全身に浴びる。村を守るために戦つてることも忘れた俺は、顔にまでかかる朱に顔を顰めた。

撒き散らしながら田の前で崩れる男の武器を手に取り、思いつきり投げ飛ばす。

俺と長を一直線に結ぶようにその槍は進み、俺もその後を追いつくに走る。

その槍は道を切り開くかのように壁を一つ、一つと打ち破り・・・四つ目の壁を貫いたところで、先が潰れて止まってしまった。

男四人を串刺しにして役田を終えた槍の活躍は、道を創るには十分だった。

「ヒィイー！や、やめてくれー！殺さないでくれー！」

情けなく喚く姿を見ても、何も感じなかつた。

恐怖に歪んだ顔を見て、快感を得る変態もいるらしく、俺はそんな性癖は持つてなかつたようだ。

強いて言ひなら・・・

ただ、殺したい。

笑う。

俺は、その首に手をかけて

父さんが、胸を斬られるところを見た。

「くそがあつ！！」

「ぐほうつ！！」

焦りに任せて胸を蹴る。

体を蹲らせて痛みにもがいでる奴なんて、もうどうでもいい。
こんな奴、いつだつて殺せる。

一体何を、舞い上がつていたのか。

村のみんなが襲われてたのに、見向きもしないで一人で笑つて。
こうなることだつて、予測出来たんじやないのか。

人を殺すことに夢中になつて。

助ける力を持つているのに、親を助けるなんてことは、考えすら
しなかつた。

走る、走る、走る。

なりふり構つてられなくなつて、力を解放する。

体の軋みを無視して、父さんの許へ走る。

全てが遅くなる感覚。

圧倒的な速さで、でもその程度じゃ遅すぎた。

崩れる父さんの首に狙いをつけたその剣は

母さんの体に阻まれた。

恐怖に押されて賊長が逃げ帰ると無駄と察したのか、他の奴らも一斉に引き揚げた。

何もなかつたかのような静けさと、荒らされた後だけが残された。空は、俺の気持ちに反して、快晴だった。

「お母さんによく似て、とても奇麗だねえ！」これは、引く手あまたじやないか！」

正直、男から容姿について言われるのは嫌だった。

でも、母さんとよく似ていると言われるのは、満更でもなかつた。だつて、母さんが喜ぶ顔が見れるから。子離れの出来ない母だつたけど、それだけ愛してくれてゐつてことでもあつて。

俺も、母さんを愛していた。

「くつ・・・はあ・・・」

「親父・・・」

止血だけ済ませた父さんが、かすれた声で呻く。いつからか、俺は父さんと呼ぶのが恥ずかしくなつた。だから、親父と呼ぶ。

初めて親父と言つたときは、かなり嫌そうにしてたけど。

「ひ・・・ひじ・・・り・・・」

父さんが俺の名前を呼ぶ。

母さんが付けてくれた真名で呼ぶ。

もう居ない、母さんが

「ひじ・・・り・・・お前が・・・生きて、て・・・」

「頼むから喋るな親父！頼むから・・・！親父まで・・・」

親父まで居なくなるのはやめてくれ、とは言わない。

だから、抱きしめる。

優しく、優しく・・・母さんがするみづこ。

なにも出来なかつた・・・何もしなかつた俺がそつする資格はないと思つけど。

暫く経つと、ふと、小さな声で父さんが言つた。

「聖、お前はよくやつた。よく村を守つてくれた。」

涙が溢れる。

不安や悲しみをあやすより、俺の背中をとする。父をんだつて悲しいはずなのに、俺の涙を受ける。斬られた胸で、痛むその胸で、俺の涙を受ける。この涙はさうじやないの。

村のことなんて考えてなかつた俺が、村を守つたなんて。自分の欲望に呑まれてこの戦いを楽しんだ俺が、よくやつたなんて。

そんなの、皮肉にしか聞こえないじゃないか。

痛い。

心が痛い。

思わず涙が出た。

その涙すら受け止めて、俺の心配をして。

自分のことしか考えなかつた俺と、自分のことよりも俺のことを考えた父さん。

自分がどれだけ屑なのか、自分がどれほど屑なのか。胸が締め付けられるような、そんな感情。

涙が、溢れ続ける。

今日は、快晴。

自分の汚れた涙を、隠すことすら出来やしない。

楽しかった。

人を殺したときの感覚。

あの満ち足りた感覚は、もう病みつきになりそ�で。
これ以上ないってくらい、楽しかった。

でも。

流石に今は、笑えない。

かあむこー（後書き）

ひじつひきんひじつひきん。

聖帝からとつました。

顧みぬと、退かぬと、槍投げをやつてみた。
わかるような文章になつてゐるかな？

聖帝さん技少ない・・・体力も少ない。○

要望（出て欲しい武将とか、いつこうネタが欲しいとか）や、
妄想（あの子可愛いとか、なになにけんぺんぺんとか）などせ、
感想に書いて頂けると嬉しいです。

えいせんせわまなにを考えていろ・・・・・・・・・・・・
評価されるのを望んでいるのかそれともジャマになつたか！
ふん・・・・まあいい・・・・・・・・・・・・・・

ハセカ一（前書き）

久しぶりに、ゲーセンに行ってきました！
友達のトキ相手にサウザーで六連敗した後。
ケンシロウで十連勝しました。

あれ？なんか田にゴミが・・・

じいさん！

母さんが死んでから、半年が経つた。
父さんの傷は完全に塞がつて、村も大分元に戻つた。
村のみんなの笑顔も、大分元に戻つた。

すれ違う人の数は、元には戻らなかつた。

男が叫ぶ。

殺さないでくれと、情けなく喚く。
それを見て、笑いながら近づく俺。

俺はそこにいるはずなのに、その光景を何故か後ろからぼんやり
と見ている。

その俺は、その首に手を掛けて

父さんの首をへし折つた。

全身から汗が噴き出る。

頭が痛し

笑しながら父さんを殺した俺は、果たして本当に人間なのか。

生きる価値は、あるのか。

震える腕を無理やりに動かして、俺自身の首を締めあげる。爪が食い込み、血が流れ始めたところ、ようやく俺はあれは夢だったのだと理解できた。

あれが嘘とは、思えなかつた。

ひどく、落ち着かない。

俺が父さんを殺すなんてことは、ありえない。
ありえない・・・はずだ。

自分の「いのち」も俺の「いのち」を考えてくれて、痛む体で支えてくれる父さん。

父さんが喋る向かいな一話である。俺を一瞬に教えてくれる。」
とがひしひしと伝わって来る。

俺が包帯を巻きなおすと同時に、無駄な時間を取らせてじっとして連いなと言つて。

俺が甲斐甲斐しく父さんの世話をしたのは、俺の痛みを和らげるため。

父さんに必要とされることで、自分に酔い、俺の罪から田を背けるため。

屑な俺の、せめてもの罪滅ぼし。

何故か、痛みは和らがなかつたけど。

ひどく、落ち着かない。

俺が父さんを殺すなんてことは、ありえない。

ありえない・・・はずだ。

・・・本当にやうなのか？

久しぶりに、父さんと一緒に寝よう。

久しぶりに、父さんに甘えよう。

そうすれば、夢を忘れると思つから。

「お、親父？」

父さんの部屋に入つて、控えめな声を投げかける。

昔と何も変わっていない、父さんの部屋。

昔より一人減つた、父さんの部屋。

「ひ、聖か。どうかしたのか？」

少し裏返つた声が、返つてきた。

「そ、そのう・・・一緒に・・・ね、寝て欲しいん、だ、けど・・・

「い、一緒にか？」

「今、何時？」

面と向かって言う勇気がなくて、下を向きながら口にする。顔が赤くなつていいくのを感じる。

見上げた父さんの顔も、赤かつた。

・
・
・
取
す
か
し
し

最近、父さんが俺のことを見つけていて、ちよつと・・・いや、かなり悲しい。

١٥

それから傷が塞がり始めて、父さんが一人で動けるようになつた途端に避けるよつになつたから、多分俺に迷惑を掛けたくないんだと思う。

それが俺の存在を否定するように見えて、正直とても苦しい。

かつた。

・
・
・
目が熱い。

卷之三

「いや……構わない、けど……」

ほんと?

ああああああああ

父さんの腕に包まれて、父さんの服を掻む。
父さんの匂いに包まれて、母さんの名残に包まれて。

小さい頃、三人でよく寝た場所。

二人の腕の中は、とても暖かくて。

毎日が、幸せだった。

父さん一人の腕だけ。

ぬくもりは、変わらなかつた。

あつたかい。

さむい。

父さんの腕の中にはいるはずなのに、俺の肌は冷たかつた。
まるで裸で居るような・・・

腹に、重い何かが乗つた。

体の違和感を確認するために、重い瞼を開ける。

一番最初に目に映つたのは、全裸で俺に跨つた父さんだった。

「・・・え？」

俺は寝惚けてるのかな。

そう思つて、目をこすつて再び見てみる。

・・・別に、寝惚けてなかつた。

「親父? これは一体? ちょっと待つてよく分から・・・」

短剣を首に押し当てられた。

少し首が切れて、血が漏れる。

少しづつ、状況が分かつてきた。

裸なのは父さんだけじゃなかつた。

寝ている間に脱がされたらしく、俺も裸になつていた。

裸の父さんが、裸の俺に跨つてゐる。

うん。

ようやく、理解した。

突きつけた短剣に力を込め続けながら、父さんが淡々と語り始める。

「・・・なあ、聖。今から俺が何をするか、分かるか?」

空から降る雨のせいで、決して静かじやなかつたけど。
その声だけが、脳に響く。

「お前が悪いんだぞ、聖。お前が優しくするからいけないんだ。母さんが目の前で殺されたとき、胸の傷なんて比じやないほど痛かった。その後に聖が無事なのを見て、せめて聖だけでも幸せにしてやろ? と俺は母さんに誓つたんだ。その次の日から聖は、傷が酷いからつて俺の世話をしてくれたよな。あのとき俺は、死ぬほど嬉しか

つた。聖はお母さんつ子だつたから、そこまで俺と一緒に居なかつたよな。だから、甲斐甲斐しく世話をしてくれて、一日中近くに居てくれて。胸の痛みを忘れるくらい、嬉しかつた。今まで少し素つ気ないくらいだつたのに、急に優しくなつて。その姿を見て、俺はやつぱり母さんに似てるなつて思つたんだよ。そう、似てる。似すぎてる。大きくなつて、母さんに似て美人になつて。そのうえ、母さんみたいに優しくなつて。俺はな、聖。俺は、お前に惹かれたんだ。お前に惹かれたんだよ、聖。お前の優しさに、惹かれたんだよ。俺は、自分を疑つたよ。なあ、聖。分かるか？俺は実の娘に欲情したんだ

「何かに怯えるように、父さんの体が震える。
でも、声だけは、震えてなかつた。

「だからお前を避けた。お前に会いたくなかった。会えればお前を意識してしまうから。実の娘としての聖じやなくて、性の対象としての聖を。だから避け続けた。避ける度に悲しそうな顔をするお前を見て、俺は心が痛んだ。陰で泣いてるお前を見て、息をすることすら苦しくなつた。お前を幸せにすると誓いながら、お前を泣かせたんだ。ひどい親だよな。でも、俺は避け続けた。避け続けるしかなかつたんだ。お前を、最後まで、娘として愛したかつた。お前を、抱く訳にはいかなかつた。なのに、今、俺はお前を抱こうとしてる。最低な男だよ、俺は。涙目で駄目かと問われて、駄目と言える親じやなかつた。好きな女が胸の中に居るのに、何もしないような男じやなかつた。・・・なあ、聖。俺が、お前をどうしたいのか、分かるか？」

何かを堪えるように、父さんの目から涙が零れる。
でも、声だけは、震えてなかつた。

「俺は、お前を犯したい」

声が、脳に響く。

自分の声。

声が、脳に響く。

同じ言葉が、何回も。

殺せ。

ただ、それだけ。

心の奥から、聞こえる言葉。

少しづつ、大きくなつて聞こえてくる。

大丈夫。

俺なら、父さんが首を切るより速く殺れる。

殺せ。

耳元で囁くような声。

その声に俺は従つ。

俺は、父さんの首に手を掛けて

やめた。

今、犯されようとしているナビ。
今、一線を越えられようとしているケビ。

俺は、父さんを殺さない。

父さんの気持ちがそれで治まるのなら、もう構わない。
別に、初めて抱かれるときの理想なんて持つてないし、他の男に
抱かれるよりは幾分かマシだと思つ。
それで満足するのなら、我慢する。
そもそも、俺は悪夢を忘れるために父さんの部屋に来たから。

俺には、父さんが必要だから。

「聖。・・・なぜ抵抗しない？」

首に掛けた手を下ろした俺の意図が分からぬのか、疑問の声を
挙げる。

「親父の・・・親父の好きにすればいい
「何故だ。構わないのか？」

「構わない。親父が満足するなら別にいいよ。母さんが死んじゃつたから。もう親父しかいないから。俺には・・・親父が必要だから」

それを聞いた父さんは、悲しそうな顔をして、手に持った短剣を振り上げて。

「・・・・・・・・・・・・・・え？」

自分の肩に、突きたてた。

「うう・・・うう・・・・」

理解出来ない。

俺を犯したいんじゃ、なかつたのか。

呻き声を聞きながら、謎の状況を、ただ見る」としか出来ない。

「・・・違つた・・・」

「え？」

父さんの言う意味が分からなくて、素つ頓狂な声を挙げる。

「お前を抱きたいんじゃなかつた・・・俺は・・・何も見てないだけだつた・・・」

「お、親父？」

「分かつたんだよ・・・俺は、お前に惹かれたんじゃなかつたんだ・

・・お前に欲情してたんじゃなかつたんだ・・・俺は・・・俺は、
ただ、お前と・・・聖と母さんを重ねていただけだつた」

堪えることをやめた父さんの手から、涙が流れ続けていた。

「俺は、認めれなかつたんだ。母さんが死んだことを。だから、聖を母さんと思い込んで、抱こうとしてただけだつたんだ。抱いて、俺の心の傷を埋めようとしてただけなんだよ。埋まるはずもないのにな。・・・聖が首に手を掛けたとき、俺は嬉しかつた。聖が抱かれても構わないと言つたとき、俺は悲しかつた。俺が望んでたことのはずなのに、心の穴は広がつたよ」

「・・・親父・・・」

「俺の心が母さんの死を認める前に、死にたかつたんだ、俺は。肩だ。娘を利用して死のうとした最低の肩だ。死ぬなら自分で死ねばよかつたのに」

「親父が・・・死ぬ必要はねえよ。親父は悪くない」

全部、俺が悪い。

母さんを死なせたのは俺だから。

「聖。一つだけ頼みがある

「・・・何?」

「もし、最低で肩な俺をまだ愛してくれるなら・・・名前を原に変えて欲しい。蘭という名は、母さんが付けたからな。俺も何か、残したいじゃないか」

「親父!? 何でそんなこと

「

まるで、遺言。

俺への願いを言い終えると、肩に刺さつた短剣をそのまま引き下ろした。

「うう・・・かはあつ！…」

「な、何してんだよ、親父！」

「し、死にたいからに・・・決まつてゐる・・・だろ・・・

何で。

俺には、父さんが必要なのに。

声に出して、伝えたのに。

どうして、分かつてくれないの。

視界が歪んで、父さんが見えない。

「親父・・・！何で・・・な、何で死のうとするんだよ・・・！俺には親父が必要だつて、言つたじやねえかよお・・・」

嗚咽交じりの声で、心の痛みを吐きだしていく。

「もう・・・死ぬしか・・・ないんだよ・・・」「なんでなんだよ！ばかやうあ・・・あんたなんか、死んじまえ

ばいいんだ・・・！」

「・・・はは・・・嫌われちゃつたなあ・・・」

違う。

こんなこと、言つてもうなんてないのに。

「ひじ、り・・・もう、一回だけで、いい、から・・・とい・・・さんつて・・・呼んで・・・ほ、し・・・い・・・」

父さんと一緒に寝て、いやなことを忘れて。

明日から、心を入れ替える予定だった。

「なんこと、望んでない。」

「…………父さん…………」

返事を待つてみたけど、返ってきたのは兩音だけ。

愛ゆえには苦しまねばならぬ。
愛ゆえには悲しまねばならぬ。

確かに、そうかもしない。

こんな痛みを受けるのは、愛のせいかもしない。

愛の証。

母さんがくれた真名と、父さんがくれた名前。
俺が背負うのは、これだけ。

俺は丁原。
真名は聖。

これだけしか、残つてない。

愛される感覚は、嫌いじゃなかつた。
でも、もう限界。
こんなに苦しいのなら、悲しいのなら。
もうこれ以上。

「愛などいらぬ・・・」

小さい頃、三人でよく寝た場所。
二人の腕の中は、とても暖かくて。
毎日が、幸せだった。

今はもう、一人。

こ れ は ひ ど い

初めは、お父さんに涙目でお願いするひじりちゃんを書きたかっただけなんです！本当に

キリサケでガーラ + 蓄積でピヨつたときぐらいひじりちゃんの心がボロボロに・・・

私なら確実に鬱になりますね・・・

愛ゆえに人は感想を書かなければならぬ！！！

愛ゆえに人は評価をせねばならぬ！！！

愛ゆえに・・・

お、女のトモ...。

ましゃべ恋姉、始まります。

村を追い出されてから、二年が経った。

村を追放されたのは、父さんが死んだ次の日。

傷心の俺を指差して、人の皮を被つた悪魔めと呼ばれた。

自分の親が目の前で死んでるのに平気なのは、自分が殺した証拠だと騒がれた。

・・・平気な風に、見えたのか。

まあ強ち間違いでもない気がしたから、否定はしなかった。

死ね、丁蘭と罵る声が周りから浴びせられた。

別に、心は痛まなかつた。

元から傷のある心は、痛みに慣れていたし。

父さんと一緒に、丁蘭は死んだから。

宿から出て、今日の仕事を探す。

追放されて金もなかつた俺は、毎日のように賊を襲つて食い繋いでいた。

何も食べれずに一日が終わるなんてこともある、不安定な生活を送っていた。

どこの領主のところで客将をするのが一番いいとは思ひなど、そんなことをするぐらーなら、死んだ方がマシだ。

上から命令されるのには耐えられないし。
好きなときに入を殺せないのも嫌。

愛などいらぬと心に決めて、丁原として生活し始めてから、少し
思考が帝王化してきてる。

あと、これはいいことなのか分からぬけど、殺人願望を受け入
れれるようになつた。

両親のことは未だに引きずつてゐけど、夢に見ることはなくなつ
た。

賊と楽しく遊びながら転々と移動し続けて、半年ほど前に此処、
漢中に着いた。

すれ違う人々の笑顔がこの街の素晴らしさを物語る。

ここまで争いのない街は、賊が年々増え続けているこの時代には
そうそうないだろう。

少しだけ滞在する予定だつたのに、気づけば半年間も此処に居る
くらいには、俺もこの街を好きになつていてる。
好きな理由は、少し違うけど。

この街は、兵を直接募集しない。

気がつけば、精強な兵が増えているから。

この街が他の街と大きく違うところが、この漢中依頼板だ。

この街の兵は、国同士の戦争や勅命があるもの以外では基本的に
動かない。

周りの小さな村からの救援依頼に応じたり、賊の拠点を叩きに行
くのは兵士達じゃないのだ。

この街の人達が、善意で動くのだ。

この漢中依頼板には、沢山の依頼が貼られてある。

店の厨房を手伝つて欲しいといつよつな依頼から、賊の討伐などの命を張るものまで種類は様々。

依頼を完了すると、依頼主や国から報酬が出る。

そして命を張る依頼を完了したものは、兵士になつて私達と共に戦つてくれないかと持ちかけられるのだ。

既に兵士として活動している者は少し給金が上がつたりする」ともあるらしい。

自分でその都度依頼を選べるので、縛られる事もない。

これだけ聞けばとても素晴らしいものに聞こえるかもしれないが、致命的な欠点がある。

依頼の失敗は、自己責任。

何をあたり前なことをと思うかもしれないが、依頼主は何も保障してくれないのだ。

兵士として戦場に送り出されそこで戦死したら、手当といつものが付く。

残された家族達が金に困ることのないよう、国からある程度の金が出される。

でも、依頼で出かけて帰つて来なかつた場合、何も残らないのだ。勝手に居なくなつた、ただそれだけ。

その後のことは、誰も面倒を見てくれない。

いくら報酬が高く設定されているとはいえ、死んだら元も子もない。

それでも、善意で動けるか。

それでも、命を懸けれるか。

だからこれは、とある理由から正義感が強い人が異常に多いこの街でしか、採用されてない。

俺がこの街を好いている理由はただ一つ。
無駄に報酬が高いこと。

全ての屋根に、文字の書かれた旗が立てられている。
ふと見る度に、苦笑い。
見渡す限りの“五斗米道”。

中々においしい依頼を見つけたので、それを受注して早速向かう。
人を二百人殺すだけで金が貰えるなんて・・・俺、幸せ。
クルクルと踊りたい衝動に駆られる。
・・・が、誰かに見られたら死にたくなるので自重することにした。

同じ風景ばかりが広がる森を進み続けると、微かに匂う血の香り。
胸が高鳴るのを感じながら、俺は少し疑問を覚えた。

この先にある玩具の溜まり場は、邪魔が入らないように受付のお姉さんに頼んだはずだ。

基本的には、同じ依頼を何人が受けても構わないことになつていい

る。

報酬指定が一人いくらかではなく、一つの依頼にいくらとなつて

いて、人数で報酬が割られて渡されるようになつていて。

つまり、人数が少なければ少ないほど、取り分が多いのだ。

報酬を一人占めしたときは、そりやもう、かなり気持ちいい。だから、俺が受けた後に誰も受けれないようになって、お姉さんに頼み込んだ。

俺以外で頼んだ人はまだ居ないらしい。

というか、一人は俺しか居ない。

別に俺が嫌われるとかじやなくて、せつかくの楽しみを邪魔されるのが嫌なだけだと言つておく。

もう血の匂いがしているといつことは、今回は残念ながら俺一人じゃないらしい。

平らな胸の俺が、巨乳のお姉さんに、頭を下げたのに。

・・・・・千切れてしまえ。

俺は、あの胸を揉みしだくことを決意して、匂いの許へ急いだ。

楽しい。

指に気を込めて玩具に触れると、面白いように切れしていく。

足に気を込めて玩具を蹴ると、面白いように飛んでいく。

腹を蹴られた玩具が後ろの木にぶつかると、その木の幹が、へし折れた。

跳ね返るように地に伏した最後の玩具の頭を、気を纏わせて踏み抜いた。

緑豊かな風景を、赤色に染め上げる。

真つ赤な葉の先、滴る濃紅。

濃厚な蜜を、撒き散らし。

腰まで届く、紅い髪。

じつと見つめる、二つの瞳

え？

そこに、女が居た。
艶のある、紅の髪。

派手な装飾はないけど、一目見て上質なもとのわかる、黒を基調
にした軽甲。

手に持つ槍には、赤い螺旋が描かれている。
力強い雰囲気を漂わせる、格好いいその風貌。
その目が、ずっと俺を見てる。

忘れてた。

先客が居たんだった。

今までにも、何回か見られたことがある。

欲望のままに蹂躪した後の惨状を見て、皆俺に怯えた。

普通の殺し方より、派手に殺ったほうが達成感があるというか

んというか。

今みたいに、あえて田を背けたくなるような感じにしたりする」とがある。

女の人が口を開けた。

大体この後は呼ばれる。

酷い、最低みたいなことを言われる。

よく呼ばれる言葉は、化け物とか、鬼とか

「天使さま・・・」

悪魔とか。

魔神とか。

・・・これは。

流石の俺も、予想外・・・というか、予想出来る気がしない。

この惨状を見て天使と答える人は、一体何人ぐらいいるんだろう。

う。

「あの、名前は何と言つんですか？」

「て、丁原だけど・・・」

いきなりの質問に吃驚して、反射で答える。

すると、俺の血塗れの手を取つて女人人は喋つた。

「私は高順、真名は秀です！」

高順は、俺の手に指を絡めて、顔を近づける。
何故一緒に真名まで言つたのか
というか、何か目が熱を帯びてるような

「私の妻になつて下さー！」

思考停止。

「どうかしたのですか？」

しつれりと言つた、しつれりと。

全く状況が分からぬ。

少し、おかしいんじゃなかろうか。
えーと・・・妻と言つたよな？

俺より胸がある氣がするけど・・・

「・・・お前、男なのか？」

「女です。・・・女同士では、いけませんか？」

切れた頬から流れる紅は、首を伝つてその胸へ。

・・・口に。

やうじやなくて。

「あのわ・・・初対面でいきなりそれは
「初対面でもいいじゃないですか。いきなりでもいいじゃないですか。
か。関係ないです、そんなこと。どうでもいいです、そんなこと。
会つて間もないですけど、分かります。私は
」

どうすればいいか分からぬから、とりあえず聞くだけ聞く。

何で言われるんだるう?

「田惚れしちゃいましたとか?
あなたの運命の相手ですか?
あなたのことが好きに

サウザーと言えばシユウ！（え

高順の真名はそのままシユウから取りました。

あのままだつたら、秀ちゃんが変態と思われてしまつ！

短いつ！

「しゅーちゃん..しゅーちゃん..」

「どうしたの？」

「しゅーちゃんは、どうにもいかなによね？」

「いかなこよ、どうにも」

「しゅーちゃん、だにすきー..」

「わたしも、すきだよ」

「しゅーちゃん、あこしてー..」

「わたしもだよ、ちやん

少し前まで人間だったものが、私の前に落ちてきた。

いや、落ち続いている。

もう既に百人ほど落ちてきたのに、それはまだ増え続ける。彼女の手足が止まらない限り。

噂を聞いた。

漢中の街は争いが起らはず、兵士ではなく街の人達が周りの賊を倒すのだそうだ。

さらに、漢中のみに存在する新宗教があるらしい。

全て嘘みたいな話だつたけれど、漢中の街には興味があつたから、街に行くついでに確かめることにした。

毎日少しづつ疲労が溜まっていくのを感じながら、漢中の街を目指し歩く。

あと一刻程で着きそなとこりで、私は運悪く賊の拠点に引っ掛けた。

一斉に襲い来る敵を槍で丁寧に突き崩していく。

だが、いかんせん数が多い。

もう四十半ばを突いていとこりの、一向に減る気配がない。

ざつと見ただけで、後百五十ほどは居そうな雰囲気だつた。

疲労も蓄積されているこの状況では、このままでは囮まれて終わってしまう。

私はそう思い、無理やり突破して街を目指し走ることにした。

私の槍は、普通の槍よりも突くことに特化している。

先を細く堅くして、突いたときの抵抗を減らし、突きが浅かつたときでも十分な傷を付けるようにした。

反面、横からの刺激に対して弱くなっているから、薙ぎ払つような使い方は一切出来ない。

だから、万が一囮まれるようなことがあれば、死を覚悟しないといけなくなる。

まだ死にたくない私は、突破するしかなかつた。

足音が聞こえる。

賊達は、ずっと追いかけてきていたようだつた。

諦めてくれればいいのにと、少し毒づく。

そんな私の気持ちに気づくこともなく、・・・気付いたといひで諦めてはくれないだろうが、足音は近づいてくる。

疲労で足が重くなり、その場でへたり込む。

足音がすぐ近くまで来ている中で、何か打開策はないかと考える。

考えて・・・神に祈るくらいしか返つて来なかつた。

足音が目の前で止まり、何かを振りかぶる音が聞こえる。終わるのかと、そう思い

鮮血が、飛び散つた。

体が崩れる音が聞こえ、視界に男の首が見えた。
顔を上げる。

不敵に笑つた女の顔が脳に焼きつく。
肩で揃えられた銀の髪。

私より少し小さいくらいの、艶やかな体。

黒の服を妖しく着崩したその女が、心の底から楽しそうな笑顔を
している。

顔が火照るのを感じながらも、その女から目が離せない。
血塗れの手で、足で今も殺し続けている。

女の背中に、光が差し込む。

最後の一人の頭を踏みぬいたその姿は、とんでもないほど残酷で。
どうしようもないほど、美しかった。

「天使さま・・・」

そう呟いてしまつほど、幻想的な美しさ。

「私の妻になつて下さい！」
「・・・・・」
「秀ちゃん、どうかした？」
「おかしくなつた？」
「なによ。女同士じや、駄目つていつの？」
「ちゃん、なんで？」
「私は秀ちゃんを

「

「あの、名前は何と書つんですか？」

「て、丁原だけど……」

突然質問したからか、上擦ったような声を挙げる。
その声にも反応してしまつ私は、丁原さんの血塗れの手を取つて
話し掛ける。

「私は高順、真名は秀です！」

私は、丁原さんの手に指を絡ませ、顔を近づける。
真名を言つたときに、胸が熱くなつて。

記憶の中の回答を、口にしてみる。

「私の妻になつて下され……」

これは、正解ではなかつたのか。
答えてくれないと、分からぬ。

「どうかしたのですか？」

不安に駆られて、言葉を発した。
よく分からぬといつた風に、首を傾げる丁原さんを見て、私は、
鼓動が速くなるのを感じた。
なぜか胸を凝視する丁原さん。

「……お前、男なのか？」
「女です。……女同士では、いけませんか？」

私の顔から胸を見て、顔を赤くしてもじもじしだす丁原さん。
その破壊力に、胸が爆発しそうだ。

・・・少し、雰囲気が変わった。

「あのせ・・・初対面でいきなりそれは

「初対面でもいいじゃないですか。いきなりでもいいじゃないですか。関係ないです、そんなこと。どうでもいいです、そんなこと。会って間もないんですけど、分かります。私は

拒絶されるような気がして、心が痛んだ。

それ以上何も言つて欲しくなくて、遮るよつに早口で捲し立てる。

私は。

次の回答を口に出す。

多分、きっと。

これは、正解。

「私はあなたを“愛”しています

“愛”という言葉を聞いた途端、泣きそうな顔をして下を向いた。
それを見て、あなたのことを好きな訳が少し分かった気がした。

わたしと、あなたは、たぶん、おなじ。

実際にそんな槍があるのかは知らない。
まあ、恋姫だしいいよね？

今より輝けいつとする 評価たちの光を奪い去る」とは許さん！！

ハート戦で、心を折つてきました。
丁寧に立ち回らないといけないし、三回触れたダメージが一回触れたダメージに負けたりするし。

一回事故るだけで殺されるんです。

七対三ぐらいついてるから、逆にプレッシャーが強かつたりして。

サウザーにも、そのガーキャン分けてください。

「・・・なあ、お前」

「お前なんて、言わないで下さい。秀と呼んでくれませんか?」

「・・・秀。なんでこっちに来るんだよ」

「聖さん、言いませんでしたか?私は元から漢中の街に行く予定だったのです」

「そうじやなくて・・・」

それは、さつき聞いた。

沢山囁かれている、馬鹿馬鹿しい噂を確かに来たとか何とか。まあ、あいつの街だし何を噂されてもおかしくはない気がする。

そうじやなくて。

「なんで、『いづはく』に来るんだよ」

近いのだ。

普通に歩けばいいのに、あらうことか腕を絡めて体を傾けてくる。

綺麗なお姉さんが密着しているところを、想像して欲しい。しかも、自分のことを好きだと言ってくれる相手だ。

愛していますなんて言われてしまつたことを差し引いても、興奮してしまうのが男じゃないのか。

体が女だから、目に見えて変わるモノがないけど。

軽甲のおかげで胸の感触が分からぬのが、せめてもの救いか。

「私は賊に襲われていたんですよ?そこを聖さんが助けてくれたんです。まさか一人で歩けなんて、言わないですよね?」

言わない、言わない。

でも、近すぎるんじゃないか。

「私はあなたを愛しているんです。だからあなたを見ているんです。
まさか見る」ともやめうなんて、言わないですよね？」

言わない、言わない。

でも、近すぎるじゃないか。

「それに、真知で呼ぶ者回士はいつもいこと、母から聞きました。
まさか母の教えに背けなんて、言わないですよね？」

言えない、言えない。

そんなの、言えるはずがないじゃないか。

真名を明かされたときは、自分の真名も言わないと黙田よ？

そんな“母の教え”に従つて真知を聞いたのだから、諦めるしか
なさそうだ。

結局街に着くまどそのままだ、俺の心情は蓄積され続ける」とい
なつた。

「噂では聞きましたが、まさか本当だつたなんて…」の街はすうじ
ですね、聖さん…」

「そ、そうだな・・・」

「」の街に着くまで絡めていた腕を、まるで俺から絡め始めたとも言わんばかりに振りほどいて、はしゃぎ回るこの変人。

周りの田も氣にしないでクルクルと踊りだす秀を見て、依頼を受けたときに踊らなかつた俺を心の底から褒めてやりたくなつた。

「あーちょっと聖さん、どこに行くんですか?」

変人を視界に入れないように依頼板に向かう俺の腕に、また腕を絡めてくる変人。

劣情を催したさつきと全く同じように腕を絡めてくる秀を見ると、嬉しそうにはにかんだ。

それと同時に寄せられてくる沢山の視線。

何故か俺の劣情は、元からなかつたかのように霧散した。

「依頼、完了したけど」
「それでは、案内致します。・・・そちらの方は?」
「気にしないでもらえる?」
「は、はあ・・・分かりました」

俺の思いが伝わったのか、隣の存在のことを無視してくれた受付のおっさん。

命を張る仕事を終わらせると、あいつのところに連れて行かれるよつになつてゐる。

あのお姉さんは、今は休憩中なのか姿が見当たらない。

・・・胸を揉ませてはくれないのだろうか。
いや、難癖を付ければ少しごらいはいいと言つてくれるんじゃな
いか。

変なものが憑いてきたのは貴女のせいだ、どうしてくれよー！
それでは、私の胸で謝罪します。

そんなくだらない」と考えて逃避する「どうやらこは、許される
と思想たい。

「おおー！本当にあらんですね、漢中掲示板ー凄いですね、聖也んー！」

俺の名前を大声で叫ぶ声を無視して、受付の後を付いていく。

「どうして無視するんですかー？待つて下せよ聖也んー！」

無視したことを抗議しながら、俺の隣まで走つてくれる。
そして、俺と同じ歩幅で憑いてきた。
当然のように、腕を絡ませて。

・・・嗚呼、視線が痛い。

「愛していますか、聖也んー！」
「激、お前黙れよ」

部屋に入つて開口一番、こんなことをのたまつ莫迦。
人を待たせておいてそんなことを一番に言つこゝつは、この國の
王である。

後ろで纏めた、淡い黄色の髪。

全てを癒すような、柔和な顔。

その髪と同じ色の服を着た、妙齡の女性。

激という真名とは真逆の、母性に満ち溢れた雰囲気。

そして何より、デカイのだ。

何がとは言わない。

言つたら何か大事なものが崩れ去るような気がしたから。

「聖さんは、私の愛を受け取つてくれませんでした！」

「おい秀、お前なんてことを

」

「まあ、なんてこと！何故彼女の愛を受け取らないのですか！」

始まつた。

「いや、その・・・だな？会つていきなり愛を受け取れー、なんて

」

「会つてこきなつでもですーどうして愛を拒絶するのですか！？」
「なんにも愛は素晴らしいのにー」

「愛が素晴らしいのは、分かつてゐる。

だからこそ、愛は要らない。

「愛に飢えた人達もこの世界には沢山いるんですよー？あなたがその思いに愛で答えるかどうかはともかく、受け取るだけでも価値あることなんです！それを、あなたはーやはり、あなたの愛に対する価値観を変えなければいけませんね。どうですか、私達

の“五斗米道”に

」

「激、お前何しに来たんだよ」

「おお、やつでした！」

俺が声を掛けなかつたら永遠に続きそつなほど、愛に煩い。

それが激だ。

「聖さん、私達と あーその前に、自己紹介しないといけませんね！私は張魯、五斗米道の師君です」

秀が居るのを思い出して、激が名乗つた。

師君といつのは、五斗米道を束ねる教祖のような存在らしい。

「張魯さんですね。私は、高順と言います。聖さんに振られた、可哀想な女です」

「可哀想な女だなんて、そんなこと…聖さん、何故彼女の

」

「激。本当、何しに来たんだお前。…帰つていいか？」

漫才をするぐらになら、お姉さんの胸を揉むための作戦を考えた
い。

「おお、やつでしたー聖さん、私達と一緒にこの街を守りませんか
？」

「断る。大体、ここは兵士になる気はないつて何回も言つてるじゃないか

「ひなに言つてこるのは、聖さんだけですよ…」

この街で断るのは、確かに俺ぐらいかも知れない。
激に声を掛けられるだけで、死んでもいいという人も居るくらい

なのだから。

愛を掲げる完全に危ない宗教。

それが五斗米道なのだ。

「あ、聖さん！涼州に行く気はありませんか？」

「？いきなり言われてもよく分からんんだが・・・」

「実は、藍さん・・・馬騰さんから、羌族が暴れ回っているので力を貸してほしい」と言われまして、それで聖さんに行つてもらいたいのですが・・・」

「どうやら仕事の依頼、らしいけど・・・

「俺に？なんで？別に軍でも派遣すればいいんじゃ

「お願いします！閻圃にも就いてもらいますし、報酬は今日の十倍

出します！」

「分かった。引き受けようつじやないか」

そのエンホとやらは誰か知らないが、報酬が十倍はおこしすぎる。受けない訳にはいかないじゃないか。

「聖さんが行くなら私も付いていきます！」

「駄目だ！」

「どうしてですか！」

「お前が一緒に来たら、俺の取り分が減つてしまつーそれは駄目だ！」

「私はあなたを愛したいだけなんです！金なんて要りません！」

「でも」

「聖さん、また彼女の愛を拒絶するのですかー聖さん、何故彼女の

「分かつた分かつた、來てもいいよー好きにしたらこよ、もうー」

二人の前でこれ以上話していると、どうにかなりそうだった。

「その口ぶりだと、まだ何も分かつてませんね！？それではいけません！・・・ふふふ、私いことを思いついちゃいました！十日後に、出立してもらいます。それまでの間に一人の愛が結びつくよう、どうでしょ！？十日間、同じ部屋で寝食を共にしてもうひとつのは？」

「は？ 激、お前何言つて

「

「素晴らしい考えです張魯わん！これからは秀とお呼び下さい！」「私の真名は激と言います！一緒に愛の素晴らしいを聖わんに説きましょ！」

「ええ！」

お前ら、それでいいのか？

真名は軽々しく渡すようなものじゃないと教わったんだが・・・

「では、すぐに部屋を用意しましょう！今すぐ！」

「

「・・・って、お前ら？何勝手に決め付けて

「ええ、それがいいです！私達の愛のために！」

「愛のために！」

かくして、十日間の同居が始まったのだった、まる。

「閻園さんに一人きりで五斗米道の良さを説き続けてもらおうと思つていましたが・・・まあいいです、秀さんを先にこちらに引き込んで二人で説き続ければ・・・長旅で疲れた心に五斗米道が沁み込んでいくことでしょう・・・ふふふ・・・五斗米道に聖さんが入信すれば、戦力に不安もなくなり、漢中以外に手を広げることも・・・ああ、素晴らしい！待ち遠しいですね・・・私の・・・いえ、五斗米道の輝かしい未来が！」

「な、なな、ななななな・・・」

「？・・・どうしたんですか、聖さん」

寝台の中に入つて」よつとした秀の姿を見て、顔が赤くなるのを感じる。

そりやまあ、秀が魅力的だとは思つし、一緒に寝るとなるとそうなつてしまつと思う。

・・・そうじやなくて。

「なんで、お前は裸なんだよー。」

そう、裸。

全裸である。

所々に傷が見られるけど、それが余計に艶めかしくて。着痩せする体なのか、思ったよりもしっかりとある胸。

巨乳と言うほどではないけど弾力のある胸が、会ってから殆ど押しつけられていた訳で。

いや、上だけじゃない。

全裸だから、下の方だつて

「寝るときは裸で寝るよしきこと、母から聞いたんです。まさか母の教えに背けなんて、言わないですよね？」

そんな教え、ある訳がない。
ない、けど

「・・・好きにしろ」

そう答えるしかなかつた。

「あの、聖さん？」
「・・・なに？何か話すことでも
「私はあなたを愛しています」

指が、背中をなぞる。

「あなたが受け取ってくれるかどうかは関係ありません。私が愛している・・・ただ、それだけです」

胸を、押しつけられる。

「あなたが受け取らない理由は、私は聞けません。そんなこと、私にとっては意味の無いことです」

腕を、まわされる。

「無理やつにでも、振り向かせます。私の価値を、あなたの中に創ります」

首筋に息を吹きかけられる。

「私の価値は、そこには出来ないですから。私の愛を、与え続けます」

でも。

「否が応でも、感じさせます。私の愛の、ぬくもりを」

欲情は、しなかった。

「私の、愛に懸けて」

黒くなこと、一国の王なんてやつてられないと思つたです。

おれは帝王一きさきめらとはすべつがちがつ……

神は「おれに沢山の評価までも『えたのだ……

えんせいいー（前書き）

怒濤の連口、始まるよー。

チャーリー

えんせい！

耐えた。

俺は耐えたのだ。

あの地獄のような十日間を。

嗚呼、大変だった。

毎日毎日起きたら秀の胸を一番見るのだ。

背を向けて寝てたはずなのに俺の顔が胸に収まっているのだ。

熱い吐息が、耳に吹きかけられるのだ。

その・・・何とも言えない声を聞かされるのだ。

もう、どうにかなりそうだった。

どうにかなつてしまつたら、私の愛に答えてくれたとかいう詭弁に付き合わされるはめになるから、なんとか踏みどりまつた。

そう、耐えたんだ！

悲しいかな、地獄を耐えて得れたものは。

ほんの少しの達成感と、沢山の疲労感。

あ、後は秀から寄せられる恨みがましい視線だけ。

この十日の役割は確か、疲れを癒して万全の態勢で臨めるようとにかくだつたはずなんだが・・・肉体の疲労が、精神の疲労に変わつただけなんじやないだろうか。

「聖さん？聖さん？」

拒絶され続けるのがこたえたのか、聖をとしか言わなくなつた。怖い。

なんとか、目を合わせるのも躊躇つて、霧囲気。田を合わせたら俺は殺されてしまつたじやなかつたか。初めて死を身近に感じた気がする。

「それで？闇闇とかいう奴はまだ来ないのか？」

「いえ、もうそろそろ来るはずですけど」

「・・・ハア。おい激、まだなの？」

「おかしいですね・・・アレ？」

「おいおい・・・もう一刻も待つてんやつになつてんだよ・・・」

見送りに来てくれたのか、あの巨乳のお姉さんの方が来たじやないか。

短く整えられた激とよく似た淡い色の髪は、蒼の髪飾りとよく合つていて。

可愛らしいひらひらの服を揺らし、その凛とした顔がこつりを見てはにかんだ。

霧囲気と服が少しずれて、かちくばぐな印象を受ける。

そして何より、揉みごたえのありそうな豊満な胸。

俺より少し小さくらこの背なのこ、この胸の違いは一体何なのが。

か。

可愛らしく体を揺らしながら近づいてくるお姉さん。

体が揺れるといふことは、もちろん“あれ”も揺れる訳で。

何がどうなるといふことはないけど、前世の名残か少し前屈みになつてしまつ。

「まつたく・・・こつになつたら来るんだよーお姉さんの方が早く

」

「すいません、すいません！遅れちゃいましたーー。」

「・・・え？」

「閻園さん、どうして遅れたんですか？」

「いやあ、寝過ごしちゃいましたーー！」

「照れることでもなんでもありませんーー。どうしてあなたはいつもいつも・・・」

「あはは・・・まあ、落ち着いて下さいよ、激様。ね？今日始まつたことでもないですし・・・ね？」

「ね？ではありません！何を開き直つてこるのですか！そんなことでは・・・」

「まあまあ。ほら、人を待たせている訳ですし・・・ね？」

「誰を待つていたと思つているんですかあなたはーー。」

「・・・え？何この状況？」

受付のお姉さんを大声で叱つづける激。

そんな怒鳴りをじこ吹く風と笑つて流すお姉さん。

そして、相変わらず虚空を見つめて俺の真名を呟き続ける秀。

嗚呼、俺は一体どうすればいいのか。

「ほら、私のことを一人は分からないんですし。じこで怒鳴ついても仕方がないですよ？」

「ま、まあ・・・確かに・・・」

「ね？えつと・・・私は閻園です。女の子が好きですー愛していると言つても過言ではありませんー」

「じこ、閻園さんーあなた何を言つてこいるんですかー。」

「まあまあ落ち着いて・・・これからよろしくお願ひしますねー丁原さんに高順さんー」

「お、おづー？アレ？」

「どうしましたか丁原さん？あ、もしかして私に惚れちゃいました

？」

「いや・・・アレ？受付のお姉さんですよね？」

「受付？・・・ああ、あれですね。あれは暇だったから手伝つてあげただけですよ」

「ああ、そうなの・・・」

そんなに軽い仕事なのか。

「どうか、あのときはとても礼儀正しいお姉さんだったんだが・・・とてもじゃないが、同一人物には見えない。」

「・・・本当に受付のお姉さん？」

「そうだと言つてるじゃないですかー！信じて下さいよーー！」

「いや、でも・・・もつと礼儀正しかったというか・・・」

「だつて一応仕事中ですから！私だつて公私の区別ぐらい付きますよーー！」

「仕事に遅れる人が何を言つているんですか！」

「あはは・・・深呼吸した方がいいですよ？落ち着きますからー！」

「あなたのせいだ・・・！」

「まあまあ・・・ほら、吸つてー吐いてー、吸つて吐いてー」

「すう・・・はあ・・・すう・・・はあ・・・」

「吸つてー吸つてー、吸つてー吸つてー」

「すう・・・すう・・・すう・・・う！ゲホゲホ！」

「あはは！本当にやりましたよ！原さん！面白いですね師君様はー！」

「はあ・・・はあ・・・閻圧さん、あなたは・・・！」

「まあまあ・・・ほら、吸つてー吐いてー」

「何回やらせるつもりですか！閻圧さん、あなたという人は・・・！」

「やらせるだなんて・・・師君様、卑猥ですー！」

「あなたねえ・・・！」

「・・・何なんだ、アンタ」

「だから私は、闇園ですよーー。」

「」の漫才は、一体いつ終わるのだろうか。
見ているだけで胃が痛くなつてくる。
これを毎日のよつにやつしているのかと思つて、激の胃を尊敬しそうになる。

ふと、闇園の服が目に入る。

莫迦みたいにひらひらの青色の服。

武器を振るうのに確実に邪魔になると思つんだが・・・

「・・・そんな服で戦えるのか？」

「大丈夫です、問題ありません！」

「ああ、そうなの」

「だつて私、戦いませんから！」

「ああ、そうなの・・・え？」

今、何て言つた？

「・・・戦わないの？」

「?どうして戦うんですか？」

「いや・・・遠征に行くんだよね？涼州に救援に行くんだよね？」

「はい、そうですよ！」

「・・・戦わないの？」

「?どうして戦うんですか？」

「絶対戦うでしょ！」

「私は戦いませんよ？」

「何で！？」

「私は涼州に観光に行くんです！」

「・・・仕事じゃなくて？」

「・・・仕事と観光に行くんです！」

「戦うよね？」

「戦う訳ないじゃないですか！だつて・・・」

ピンと張りつめられた空氣。

息をするのも憚られるような緊張感。

思わず、「ククリと喉を鳴らす。

そして

「だつて、服が汚れてしまつじやないですか！」

「・・・・・・へ？」

緊張感は、一瞬にして霧散した。

「分かりませんか、この服の価値が！？これは最新の阿蘇阿蘇に特集が組まれたもので、これを着ている・・・ただそれだけで崇められてもおかしくはないものなんです！氣品溢れる姿の中に、可愛さが同居している・・・この全ての若者が思わず手を伸ばしてしまつような

「おい、秀行くん」

「聖さん？聖さん？」

「いい加減正気に戻れ莫迦

「ひじ・・・聖さん！？嗚呼、私の手を取つて・・・ついに私の思ひに答えてくれたんですね！」

「早く行くぞ莫迦」

「はい！嗚呼・・・幸せとはこのことを聞つてしうが・・・」

！」

「あ、ちょっと！待つて下さいよ一人とも！一応私も仕事なんですからーー！ちょっとーー！」

「…………彼女に任せたのは失敗だったのでしょうか…………」

「・

「…………これは凄い…………」
「でしょー！？どうですかこの天幕は！私が丹精込めて作り上げた入魂の一作ですよ！」

「…………アンタ凄いんだな

「むむむ！？私を一体何だと思っていたんですか！」

「ただの莫迦」

「ひつどーい！こんな乙女を莫迦呼ばわりですか！天幕に入れさせてあげませんよ？」

「・・・悪かつたつて」

「仕方ないですね・・・私と接吻をしてくれたら

「秀、入るぞ」

「はい、聖さん！」

「ちょっとー? 無視は酷くないですかー?」

「黙れ莫迦」

「すいませんすいません、機嫌直して下せーよー。」

流石に今日は脱がないのか、服を着たままで秀が腕を絡めてきた。十日間の裸の誘惑に耐えきつた俺なら、これぐらいは大丈夫だ。だけど、隣の莫迦の視線が恐ろしくて仕方がない。

「おお、アツアツですねーー! ふふふ・・・どれ、私も・・・」

「おい、お前来るな! 外で見張りでもしとけ!」

「何ですか? 人の気配も感じないほど爆睡するんですか?」

「そうじやないけど・・・」

「ならいいじやないですか! 私、言いましたよね? 女の子が大好きなんです! 特に、丁原さんのよつたな胸の無い女の子が!」

「おい、莫迦! やめ

」

時既にお寿司。

両腕に感じる、確かな感触。

両耳に感じる、悩ましい吐息。

何も答えてくれない、黄色の天井。

もう逃避するしか、俺には残されていなかつた。

嗚呼、お寿司が食べたい。

えんせい！（後書き）

結局何が言いたかったのか。
最近寿司食べてないなあ（おい

違うんだ！キャラが勝手に・・・

まくはつー（前書き）

作者は原作未プレイです。
作者は原作未プレイです。
大事なことなので何度も言います。

チャーリー

ぱくはつー

「よく涼州へ来てくれた！私は馬騰だ。涼州はあなた達を歓迎するよー！」

涼州に着くと、御胸様が迎えに来てくれた。

そう、御胸様である。

そう、御胸様なのだ。

鬱陶しいと思われようが、何度も言ってやろうじゃないか。

大きい。

巨乳だと爆乳だとそんなチヤチなものでは断じてない。

そう、大きい。

俺の持つ語彙ではしっかりと語れないのが残念だが、これを見ることが出来ている私はとても幸運な存在なんじゃなかろうか。

「あたしはホウ徳、字は令明！よろしく！」

何とも姉御肌な雰囲気の女。

迎えに来た中で一人だけ浅葱色の髪をしていた。

「私は馬超、字は孟起っていうんだ！」

「ほら、蒲公英も！」

「おば様、たんぽぼも自分で言えるもん！たんぽぼは馬岱っていうんだよ！」

可愛い。

馬騰の家族らしいその二人は、馬騰と同じ茶色の髪を纏めていた。可愛い、が・・・まあ、馬騰があれなんだ。将来凄いことになるのもあり得る。

これからに期待することにしよう。

母さんも胸が大きかつたから、俺もまだ大丈夫……なはずだ。

「高順です。よろしくお願ひします」

「俺は、丁原だ。よろしく。……おい」

「……あ、はい？」

「閻圏、お前も言えよ」

「私はいいですよ、もう知りますから。ねつ！」

楽しそうな顔になる馬岱とは対照的に、嫌そうな顔をする馬超。
……こいつ、何やったんだ？

「まあ、ゆつくり休んでくれ。出立は明日だ。その腕に懸かってる
んだ、頼んだぞ！」

「分かつた。期待に添えるように、頑張るよ」

ここに来たのは、三人だけ。

それは、俺の活躍に期待してのことだらう。
期待されるのは、嫌いじゃない。

「久しぶり、ばっちゃん！」

「ば、ばっ・・・！」

「もう、可愛いなあばっちゃんは！」

「か、かわ・・・！わ、私のどこが可愛いっていうんだよー！？」

「えつと・・・全部？・・・ねえ、接吻していい？」

「な、な、なな・・・！？」

「姉様、顔真っ赤ー！」

「かーわーいーいーつー！」

・・・ホント、何しに来たんだアイツ。

寝台で一人、上を見る。
一面を青に染められた天井は、さながら空のよう。
青以外に何もないそれは、空よりも綺麗で、何よりも虚しく見える。

寝台で一人、夢を見る。
愛に満ち溢れた、過去のこと。
過去であり、夢である。
毎日のように見ていた夢。
見飽きてしまったのか分からぬけど。
もう、涙は出なくなつた。

「失礼します」

入つて来たのは、秀だつた。
いつものようにはしゃがないのを不思議に思いながら、体を起こす。

「どうした？」

「いえ……ただ、悲しそうだなと……」

悲しい？

「どうして、悲しいと思つたんだ？」

「だって、泣いてるじゃないですか」

俺が、泣いてる？

「何で俺が泣いてるんだよ。俺、涙なんて……」「泣いています。私には分かります」

勝手な解釈をされて、怒りを覚える。

・・・耐える。

「お前に・・・何が分かるんだよ」「分かりますよ、あなたの」と

声が震える。

・・・耐える。

「分からねえよ。お前には」

「分かるんですよ。私には」

思わず歯軋りをしてしまひ。

・・・耐える。

「何が分かるんだよ。お前なんかに」

「分かりますよ。どうして泣いているのか、話してはくれませんか

？」

・・・耐え

俺を心配したのか、覗き込むように俺を見る。
その姿が夢の“あの人”と重なって

感情が、爆発した。

「お前に、お前に俺の何が分かるつていうんだ！お前は俺の何を見
ているんだ！」

静寂。

時が止まつたのかと錯覚する。

俺の感情が、時を止めたのかと理解する。

暫くして、この女が口を開こうとするのが見えた。
それを遮るように、声を振り絞る。

「もしお前が本当に俺を愛しているなら・・・早くここから出て行
ってくれ・・・」

女は何か言いたそうにしていたが、そのまま背を向けてゆっくりと去つていった。

寝台で一人、上を見る。

一面を青に染められた天井は、さながら空のよう。青以外に何もないそれは、空よりも綺麗で、何よりも虚しく見える。

寝台で一人、目を瞑る。

一人で寝るのは、久しぶりな気がした。

慣れた筈の胸の痛みが、ひどく怖く思えてしまう。

慣れた筈のその孤独は、ひどく虚しく感じてしまう。

少し前に、戻っただけ。

なのに、中々寝付けなかつた。

口調わからんのや・・・

許して（笑）

あ、すいません、叩かないでくださいー

ホウ徳の当て字でいいのはないのか・・・

短いけど区切るんですよ

唸れ、俺の右腕よ！
厨二の限りを書き記せ！

チャーリー

「お前達の腕に懸かっているんだ！頑張ってくれよー。」

馬騰の話によると、軍を三つに分けて一つの部隊を羌族に当てて引きずり出し、そこを横から挟み撃ちにするらしい。そんな単純な動きでいいのかと聞いたところ、義勇軍も多く混じつていて高度な動きは出来ないんだそうだ。

それに、羌族は略奪が上手くいっていて調子に乗っているとも。

中央の陽動部隊は俺と秀、左翼が馬騰と馬岱、右翼が馬超と閻圃、ホウ徳という布陣。

言い方は悪いが、居なくなつても構わない俺と秀を陽動に置くのは当たり前か。

まあ、期待に答えるとしよう。

「・・・ひ、聖さん」

「・・・何か用か？“高順”」

「・・・！」

「どうした？」

「い、いえ・・・その、兵達を鼓舞したりは？」

「必要ないだろ。士気だけは莫迦高いんだ。空回るかどうかが心配

だよ

「そうですか・・・」

「羌族が見えてきたじやないか。ほら、行くぞ“高順”」

「・・・はい」

直剣をかわし、足の腱を引き裂く。

突きだされた槍を蹴り上げ、その腕を切り裂く。

久しぶりの、昂揚感。

前世の影響が抜けきらないのか、人を殺すことに悦びを感じてもまだ意味もなく殺すのは気が引ける。

そんな俺にとって、大義名分のある戦というものは、それだけで甘美なことだった。

切る、裂く、潰す。

自己陶酔。

人を殺す度に湧きあがる悦び。

何故か今日はそれとは別の、謎の感情に震えていた。

今この場所に居る俺を俯瞰しているような不思議な感覚。この瞬間、手で敵を貫いた俺を上から見るような。例えるなら、本の中の主人公を見守る読者のよう。主人公の活躍に一喜一憂する読者。

その感情は、必ずしも主人公と同じという訳ではなく。

まるで、二重人格に成ってしまったかのようだ。

今貫いたはずのこの手には、何の感覚もなかつた。

意味のないくだらないことを考へてゐるが、合図の銅鑼が鳴り響いた。

反転して、打つてである。

挿撃によつて瓦解していく羌族。

それでもなお、立ち向かつてくる者達。

仲間が今逃げ出しているといつて、臆することなく立ち向かうのは、誇りか、自信か、それとも

剣を捌き隙だらけの体を蹴り上げる。

脚の通り道を黄色の閃光が走る。

そして、朱が舞つた。

脆く崩れ落ちる体。

俺はそれを一瞥すると、前へ

足を、何かが掴んだ。

崩れ落ちた筈の男が、俺の顔を見上げた。

紅い涙で濡れたその顔は、父さんによく似ていた。

「俺は、お前を犯したい

」

あのときと何一つ変わらない声が頭に響く。
あのときから何一つ変わらない痛みが胸を叩く。
あのときと何一つ変わらない俺の心は。
あのときから止まっているのだろ？。

決して傷を癒すことなく、時間は過ぎ去っていく。

俯瞰感覺。

それは、理解したくないだけで。

二重人格。

それは、心を止めているだけで。

自己陶酔。

それは、目を背けているだけで。

謎の感情。

それは。

生きているといつも実感が湧かない。

・・・違う。

生きる理由を見出せない。

・・・違う。

もつと単純なこと。

俺は。

俺は、ただ

死にたい。

その場で、へたり込む。

力が、入らない。

血だらけになりながらも、足を掴み這い上がってくる男への恐怖
じゃない。

ようやく死ぬことが出来るのだという安堵から、無意識に力を抜

く。

男が、俺の胸倉を掴む。

血塗れの男の顔は、それでも死んでいなかつた。

今にも死にそうな、生きたい男。

傷一つない、死にたい女。

死ねる。

ようやく。

何も理解できない毎日から、解放される。

男は、俺の首に手を掛けて

男の顔が、蹴り上げられた。

体が崩れる音が聞こえ、視界から男の姿が消えた。
顔を上げる。

そこには、見慣れた女が立っていた。

艶のある、紅の髪。

派手な装飾はないけど、一旦見て上質なものとわかる、黒を基調
にした軽甲。

手に持つ槍には、赤い螺旋が描かれている。
力強い雰囲気を漂わせる、格好いいその風貌。
理由は分からぬけど、その女から旦が離せない。

女の背中に、光が差し込む。

男の頭を踏みぬいたその姿は、とんでもないほど残酷で、どうしようもないほど、美しかった。

そう、例えるなら

「ふう、疲れたな！」
「ええ、疲れましたねー！」
「闇園は何もやってないじゃないか・・・」
「また啼かせて欲しいの？ば・ちょ・う・ちゃん？」
「お、お前な・・・！」
「なになに？たんぽぽにも教えて？」
「実は、ばつちよんつたらね？・・・」
「な、何を勝手に言つてるんだ！？やめろーー！」

「いやあ、一人のおかげで助かったよー正直あまり期待はしていなかつたんだが、一人が頑張つてくれたおかげで少ない犠牲で追い払うことが出来た！ほら、呑みなよ！」
「・・・いや、いいよ」
「？どうしてだい？」

「ちょっと、横になりたくてさ」「そうかい・・・ゆつくりしなよ」

「ああ・・・」

「お前は、どうする?」

「・・・」

「はあ・・・よく分からんが、行くなら早めに行つた方がいいぞ」「・・・はい」

「何ともまあ・・・面倒な奴らだ。抱える必要なんてないっていふのに・・・」れじやあ酒が不味くなるじゃないか

「馬騰さん!」

「お、闇園か。どうした? 向こうは暇か?」

「いえ、たつぱり遊んだので馬騰さんの酌をしようと思いまして」
「はは・・・あんまり翠を苛めないでやつてくれ」

「それは、要検討ということです」

「おいおこ・・・ほら、呑みなよ

「むむ・・・いいんですか?」

「私の酒が呑めないのか?」

「私が酌をする予定だったのですが・・・では、ありがたく

「おう。・・・お前はあいつらの」と、どう思つ?」

「ありがとうございます。・・・あいつらとは?」

「あの一人だよ

「私は人の恋路を邪魔するほど無粋じゃないですよ」

「お前なあ・・・」

「部外者が口を出して解決するよりこは見えませんし・・・面倒事に首を突つ込む趣味はないので」

「お前なあ・・・」

「部外者が口を出して解決するよりこは見えませんし・・・面倒事

「どの口が言うんだか。まあ、案外明日には元気になつてゐるかも知
れないな」

「ですね。・・・乾杯します?」

「そうだな。じゃあ・・・勝利と愛に」

「馬超ちゃんの赤ら顔に」

「お前らしいな。まあいいや」

「「乾杯」」

寝台で一人、上を見る。

一面を青に染められた天井は、さながら空のよつ。
からつぽの空を見て、俺は何を思うのか。

「失礼します」

入つて来たのは、秀だつた。

気まずい雰囲気が流れる。

流れ続けて消えてはくれないのか。

「・・あのー」

抵抗しなかつたことを問い合わせられるのか。
無視することを問い合わせられるのか。
それとも・・・

「昨日は、すいませんでした！」

「・・・へ？」

「あなたが受け取らない理由は聞かないと言っていたのに、話してくれるよう迫つてしまつて・・・」

そんなこと？

そんなことを謝るために懇々来たのか？

「・・・別にいいよ、そんなこと」

「本当にですか？死のうとしたのは私のせいですよね？」

急に体が重くなつた、気がした。

「・・・いや、違うよ。俺が死にたかったからそうした

「嘘です」

「何だよ、嘘つて」

「死にたい訳がないです」

「俺がそうだと言つてるのにか？」

「・・・本当に死にたいんですか？」

「ああ」

「そうですか」

「なら、私が殺します」

不意に、体を押し倒された。

首筋に短剣を当たられる。

俺に跨る秀。

図らずも“あの時”と同じ状況になってしまったのを喜ぶべきか。
まあ、死ねることを悦ばう。

振り上げられた短剣は。

俺のナニ力を切り裂いた。

短剣が耳元に突き刺さる。

決して俺を傷つけることなく、寝台に突き立てた秀は。

「これで、丁原は私に殺されました」

そんなことを宣った。

「お前、一体何を言つてるんだ」

「丁原は私に殺されたと言つたんですね」

「何を莫迦なことを。俺は生きてるじゃないか

「ええ、生きてますね」

「お前、莫迦だろ」

「私にはあなたを死なせることは出来ません」

「だから殺したと？」

「はい」

それは、屁理屈で。

「だつて聖さん、泣いてるじゃないですか」

「俺が、泣いてる？」

「ええ、泣いてます」

「嘔吐くなよ」

「涙、出でますよ」

「え？」

頬が冷たい。

知らない間に濡れてたみたいだ。

「泣いてねえよ」

「泣いてます」

「俺が泣いてねえって言つたら泣いてねえんだ」

「それ、屁理屈ですよ」

楽しそうに笑う。

その笑顔を見ると、何故か自分が小さく見えた。

「・・・なあ、秀」

「何ですか？」

「俺のどこが好きなんだよ。俺、そんなにいい奴じゃないぞ？」

「違いますよ、聖さん」

「ん？」

「愛するのに理由なんて必要ないんです。聖さんも、分かっているでしょ？」「

確かに。

言われてみればそうかもしない。

「でも、俺はお前の愛を拒絶して

「振り向かせればいいだけです。諦めません」

なんて、強い心なのか。

なんて、真っ直ぐな心なのか。

「でも、俺は愛を信じられない

俺の愛した母さんは、俺のせいで死んだ。
俺の愛した父さんは、俺のせいで狂った。
俺の愛のせいだ。

「愛は、哀しみしか生まない」

「本当にそうですか？」

「え？」

「私は今、あなたを愛しています。今、私は幸せです
「そんなの

「おかしいですか？愛で幸せになれるんです」

それでも。

「俺は愛を求めてない」

「嘘です」

「俺がそうだと言っているの？」

「ええ。あなたは愛を求める。絶対に」

「絶対つて・・・」

吼える。

「お前に、お前に俺の何が分かるっていうんだ！お前は俺の何を見ているんだ！」

昨日と一字一句違わぬ言葉。
答えは、すぐに帰つて来た。

「そこに理由は必要ですか？私はあなたしか見ていません。私はあなたしか要りません。だから、確信します。あなたには愛が必要だ。理屈ではなく、感情で。私は、あなたと生きたい」

正しく狂言。

定まらない言葉の波。
理解する前に、“理解”した。
理屈ではなく、感情で。

「私はあなたを愛しています」

抱きしめられる。

「あなたが受け取ってくれるかどうかは関係ありません。私が愛している・・・ただ、それだけです。あなたが受け取らない理由は、私は聞きます。そんなこと、私にとつては意味の無いことです」

腕を、まわされる。

「無理やりにでも、振り向かせます。私の価値を、あなたの中に創ります。私の価値は、そこにしか出来ないですから。私の愛を、与

え続けます」

胸を埋める甘い匂い。

「否が応でも、感じさせます。私の愛の、ぬくもりを。私の、愛に懸けて」

哀しい思いは、今はなかつた。

「私の愛、感じましたか?」

愛ゆえには苦しまねばならぬ。
愛ゆえには悲しまねばならぬ。
嗚呼、それは紛れもない真実。

でも。

もう一度だけ、その愛とやらを。
信じても、いいんじやないか。

「また死にたくなるかもしれないぞ?」

かすれる声で、呟く。

「そのときは私がまた殺します。何度も」

答えは、在った。

「裏切つたら、殺すからな」

震える声で、呟く。

「裏切りませんよ、死なない限り」

答えは、在った。

「・・・聖せん」

顔を上げる。

・・・なんだ、お前も泣いてるじゃないか。

「もしあなたに私の愛が伝わったのなら・・・」

それだけ言って、目を閉じる。

答えは、在った。

三人目の唇は、少しそうっぽい味がした。

ここまで愛してくれる人に会いたい。

まあ、居る訳ないんですけどね！

サブタイトルの書き方をもう既に後悔している。orz

少女（…）両替中…

おめざめー

アンケートを取りたいんだ！

問一、主人公陣営について

貧 原作キャラも入って構わん！

乳 原作キャラは原作陣営に決まってる！オリキャラだけにしどぞ！

問二、北郷一刀について

ひ もちろん居ないと始まらない！

じ 種馬には死を！といつか来るな！

り おいおい、マジかよ・・・いいつ女だったのか・・・

問三、もし種馬が来たら・・・

魏に決まつてゐやう！

いやいや、呪でしょ！

蜀じゃないと許せない！

まさかの丁原ルート！？

う　　お　　い　　て

あと、オリキャラ募集は永遠に続いております。

おめやー（後書き）

アンケートにご協力お願いします。

この十字陵は偉大なる師オウガイへの最後の心！！！
そして いのおれの感想と評価の墓でもあるのだ！！！

けいかく！（前書き）

2Bをジャンプキャンセル出来るシンが居たらキャラ替えします！

けいかく！

何かに包まれるようなぬくもりに田を覚ます。

田に飛び込むのは昨日の朝と変わらない青。

腰を温めるのは、秀の腕。

たつた一日で何か変わるとは思えないけど。
きっかけは、あつた気がした。

声を掛ける。

ただそれだけのことが、何故か嬉しかった。
愛の苦しみは、まだ胸に。

愛の喜びも、今胸に。

おまけよ。

当然のように腕を絡めてくる秀。
当然のようにそれを受け入れる俺。
当然のように倒れそうな闇闇。

「まあ、向ともお熱い」とで・・・

いつもなら二口二口しながら煽つてくるのに、元気の欠片もない声が来るとはかなり危ないんじゃないか。

「・・・お前、大丈夫か？顔色悪いぞ」「ちょっと、呑みすぎちゃいまして・・・」

「・・・ちょっとには見えないんだが」

「馬騰さんが強すぎるのが悪いんです・・・頭痛が痛い・・・」

莫迦なことを言つ閻圃。

頭痛が痛いとか、本格的に手遅れな気がする。

「閻圃さん臭いですよ」

「酒臭いなお前」

「こんな可愛い乙女に臭いだなんて・・・ビリビリつも・・・おえ

つ

「吐くなよ！？吐くなよ！？」

「大丈夫です・・・乙女ですから！」

それは、とてもイイ笑顔だった。

「おい、何で俺にもたれ掛かるんだ！やめつーちよつと悉、離れるなよ！愛してるとか言つただろ！？」

「これも愛ですよ」

「そんな愛があるかーちょっとー！」

「ありがとなー！激にまよひへじへ言ひとこてくれー。」

「分かったよ、馬騰」

酔い潰れた影響で恐ろしこになつてこむ闇黙とは対照的に

ても元気そうだ。

とても子を産んでこるとは思えないほぢい。

抱き合ひ。

やましことはないのこ、焦つてしまひ。

抱き合ひといふことは、アレと真正面に対峙する」ともある。つまり、潰れるのだ。

アレが。

胸に当たる確かな感触。

あまりにも甘美なその誘惑は、世の男どもを虜にする。

触れた瞬間の絶頂に勝るとも劣らないその快感は、まるで世界全てを凝縮したような

「・・・あつ」

「何を名残惜しそうな顔をしてるんだお前は」

「い、いや・・・別に・・・」

「触りたいか？」

「・・・えつ！？」

「嘘に決まってるだらひ」

「えつ・・・」

「・・・可愛いなお前」

弄ばれる。

だがしかし、御胸様に弄ばれるならそれはそれで・・・。
腕を組む力が強まる。

ギギギと横を見ると、素晴らしい頬笑みを携えた天使がそこには。

「・・・聖さん！」

頭を力任せに引き寄せられる。

目に映るのは据わった眼。

思いつきり腕を振りかぶり

「んう！？」
「・・・んあ・・・ふはつ」

俺の首にまわしてきた。

唇に柔らかな感触。

頭の処理が落ち着かない。

「あ・・・え・・・？」

「ご馳走様でした」

秀の言葉が耳に入り、ようやく何をされたか理解した。
理解したけど、よく分からぬ。

「てつきり殴られるのかと思つたんだけビ・・・。
「そんな訳ないじゃないですか」

失礼ですねと頬を膨らませる秀。

「暴力は愛じやないですよ。嫉妬はしましたが、聖さんを殴るなんてことはあり得ません。他の人に向いたのなら、また振り向かせるだけですよ。私は聖さんを愛していますから」

「そ、そつか？」

顔が赤くなるのが分かる。

確かに昨日秀からの愛を受け入れたが、こう面と向かって口口にされるとむず痒い。

もう一度と急かすように、秀が目を瞑る。

それを見て、俺もその唇に

「やつこつことは他所でやつてくれないか？」
「ひやあつ！」

唐突に声を掛けられて、俺のものか疑わしい声を上げる。
いや、唐突にというか初めから見ていた訳だけども。
見られていたというのを意識してまた赤くなる。
多分、林檎に負けない赤さじやないだろうか。
赤いのは俺だけで秀の顔色はいつもと大差なかつた。
赤い顔とは別の意味で恥ずかしい。

「どうして邪魔するんですか馬騰さん？」

「邪魔といわれてもなあ。見せられてるこつちの気持ちにもなつてくれよ全く」

「幸せですか？」

「まあいけしゃあしゃあと・・・そんな」と、よく言えるな高順は

角砂糖をそのまま齧つたような顔をする馬騰。

「甘いのは好きだけど、甘すぎるのは胸焼けしそうで遠慮したいね」「そうですか。では他所でやつてきますね」

「やりねえよ莫迦」

「もしかして、馬騰さんと話していたのに嫉妬します？聖さんには嫉妬してもいいえるなんて、幸せです！」

頬に手を当ててくねくねと動く。

秀だから絶的にマシなもの、これをムキムキの筋肉達磨がやつたとしたら確実に死傷者が出ると想つ。

「お前、やつぱり莫迦だろ」

「もう少し、居たかったですねー」

「何で？」

「馬超ちゃんが可愛いのでー。」

御胸様の子か。

可愛かつたな、確かに。

将来にも期待が持てるといつぱり良い。でも、馬超といえば・・・

「・・・お前、何やつたんだ? 一言ぐらりしか喋つてないのに急に助けてくれつて言われたんだが」

いきなり俺の天幕に飛び込んできて助けてくれと言われたのだ。状況を全く掴めていない俺だったが、必死だったから匿つてやつた。

それだけで凄く感謝されたのは強烈に覚えている。

「私のせいではありませんよーーそれ、馬ばせちゃんの悪戯ですって!」

「お前、人のせいにするのは駄目だと思つさ!」「本当に何割かは馬ばせちゃんが悪いんですよ!」

「何割かは?」

「ええ、何割かは!」

「これはひどい。」

馬超のためにも、早く出たのは正解だったか。

「私は聖さんと結ばれただけでもういいです!」

「結ばれてはねえよ。受け入れただけ」

「それでも大きな前進です!」

秀がぎゅっと抱きついてくる。

少し秀の方が大きいせいがか少し後ろへふりつぶ。

その後ろに閻圏が居る訳で。

「おやあー? そんなに甘えたいんですか! 原さんばーふふ、いいでしょ! 私が抱擁してあげましょ!」

閻圏まで抱きついてきた。

俺の方が少し大きいとはいえ、その大きな胸に押されてしまつ。

左に秀、右に閻圏。

俗に言つて両手に花といつやつなのが果たして、これは幸せなんだろうか。

からかうために押していく閻圏に負けまいと、秀も一緒に押していく。

柔らかさとがせついたものを一切感じられず、むしろ息苦しくなつていく。

窒息死とか、洒落にならないぞこれ。

「あー。」

ふいに、閻圏が声を上げる。

「どうした、閻圏」

「丁原さん、五斗米道に入信しませんか！」

「いきなりだな・・・」

語尾が疑問ではなく断定だった気がしないでもないが、気にしないでおこう。

「うん。」

五斗米道に入信するといつひとは激のトロヘイドアのことで、それは非常に好ましくないことがだが・・・

「いじよ、別に」

「ああ、やつぱりいいです？はあ、そりやいに決まつてますよね。・・・一？えー？」

「入つてもいって言つたんだよ俺は」

「本ですか！？」

「まあ、何だ。その愛とかいうヤツに助けられたみたいだし……
入つてやるぐらいは別に……」

途中で恥ずかしくなつて尻すぼみに消えていつたけど、大事なと
ころは聞こえた筈だ。

驚くのも無理はないと思つ。

今まで勧誘され続けてずっと断つて来た訳だし、少し前の俺も吃
驚してゐるだろう。

「だから入るよ、五斗米道」

「・・・・・した・・・・」

「え？」

「来ました！遂に私の時代到来です！」

急に暴走し始めたんだが、大丈夫か？

「先に高順さんを入信させて、長旅で疲れたところを一人で勧誘を
すると見事に入つてくれる！いやー、師君様の計画を聞いたときは
そんなに上手いようにいく訳がないと思つていましたが、いやーこ
れは！現実は甘いものなんですね！高順さんを入れる必要があつた
のかどうか！丁原さんの勧誘に成功ということで、お給金が倍近く
に！師君様、この話は嘘だなんて言わせませんよ！これで阿蘇阿蘇
の商品も買い漁れるように・・・ああ、素晴らしい我が人生！」

「・・・・・」

「こいつ、今何を口走つた？

計画とか言つたんだが、気のせいじゃないよな？

秀と顔を見合わせる。

秀の顔も、情けないものだつた。

何だ？

全では激の中の半の上とでも言つてしまつたか?
答えが返つてくるはずもないけれど、質問を口にする。

「今のは、本當か? 激に踊らされたってこと?」
「やのヒーリング...」

答へ、返つてきやうつた。

「一寧に親指まで立ててみせてくれた。
色々とくわべしきになつて、聞いたことが沢山浮かんじる
とつあです。」

「こつ、確実に莫迦だ。」

けいかく！（後書き）

想像してござりん？

くねくねと踊る漢女達を。

・・・おえつ

おねがい！（前書き）

更新なしで放置するのは駄目だと想つので……

おねがい！

一つの事情により、更新を停止させて頂きます。

一つ目は、パソコンの前に座れる時間が少なくなったことです。
こればかりは忙しくなるので、何とも言えません。

二つ目は、私がオリジナル小説を書いてみたいということです。
こちらは完全に私の我が儘ですが、理解して頂けたらと思います。
せいでいさんがんばって！を楽しみにしてくれている人達には申し訳ありませんが、ご理解お願いします。
完結せずにしてお放置することはほしくないので、必ず再開します。

いつになるかは分かりませんが、その時までお待ちください。

応援して頂けたら嬉しいです。

おねがい！（後書き）

オリジナル小説の方で感想を頂けたら私の励みになります。
必ず帰ってきますので、待つて下さい！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5694z/>

せいていさんがんばって！

2012年1月13日22時48分発行